

上方落語の商家噺における 待遇表現の社会言語学的分析

A Sociolinguistic Analysis of the Interpersonal Expressions Staged in the Business Scenes of the Kamigata Rakugo Stories

角 岡 賢 一
KADOOKA Ken-ichi

要旨

This paper will focus on the Kamigata Rakugo stories staged in wholesale stores in the Semba region, which has been the center of the commerce in Osaka. They deal with cotton, plant oil, paper and so on, as well as rice. In these businesses, both employers and employees lived together; employers' family also lived together, while employees were unmarried. Apprentices began their career in their early teens, and finally became head clerks. Such interpersonal situations were linguistically realized in the Rakugo stories. From the junior or younger generation to the senior counterpart, honorific expressions were mandatory.

Keywords

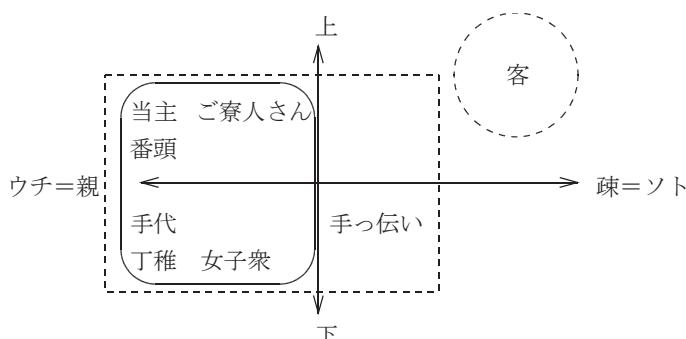
船場 (Semba)、丁稚 (apprentices)、手代 (senior apprentices)、番頭 (head clerks)、当主 (masters)

第一節 はじめに

上方噺において、商家ネタが占める比重は非常に大きい。地理的に、中心に船場があって、お城は東に大きく離れている。まずもって、これが象徴的である。太閤鼈屋の町衆としても、天守閣がないお城には何ほどの意味も見いだし得なかったのであろう。そして太閤鼈屋という心理は、徳川憎しと表裏一体であったことは想像に難くない。歴史的には、城の西に位置する船場周辺に京から商家を呼び寄せて街造りをしたというのが実情に近いのであろう。しかし幕府が江戸に移って、上方が政の中心から離れたのと引き替えのように、大坂は天下の台所となる。そして文化の中心は、だだっ広い平野に幕府を開いた江戸が町として成熟するまで、上方がその地位を保っていたのである。江戸には東国を中心として周辺から人口の流入が続いた故に、言葉など文化も洗練とは程遠いものであった。それが落ち着いて、ようやく上方文化に対抗し得るような成熟度を増すのは、開府から百年ほどの元禄期が一つの画期であったろうか。この時期は、京・大坂・江戸という三都において東西の差が際立ってくる分岐点である。まずは大坂で人形浄瑠璃の人氣が沸騰し、それが歌舞伎にも伝播する。江戸の歌舞伎は独自の道を辿る。この辺りは、町人文化、大衆娯楽というような観点からも興味は尽きない。これ以上深

入りするのは避けるが、上方噺と江戸噺という流れを考える上でも、稿を改めて論考を深めたい時代である。

ここで、店における階層構造と親疎の関係を組み合わせて次のように二次元的に図示する。



図一 大店での人物相関

お店の階層構造としては、当主は雇う側として絶対的である。番頭以下は奉公人という立場であるが、一つ屋根の下で暮らす仲で、親しい間柄にある。当主の配偶者としてご寮人さんという存在がある。女子衆は当主家族とお店一統の世話をする役回りである。図では親疎尺度で中立に近い位置に示したが、これは性差によるものである。手代や丁稚は店番をし、女子衆はその手代や丁稚を世話するというように役割上の違いもあれば、一つ屋根の下で暮らす中で互いに気を配らねばならない場合もある。こういう店内部の人物相関とは別に、手っ伝いという層がある。噺『質屋蔵』や『崇徳院』では、突発的な用向きが発生した折に、気軽に頼める便利屋的な存在として描かれている。

親疎の尺度で、店に買い物に訪れた客はお馴染みさんではないという前提で疎の極に位置付けている。全般に、初対面同士の会話というのはぎこちないので、噺という展開上では親しい間柄での何気ない対話が好ましいものと考えられる。商家もので具体的に商売が特定できるネタとしては『質屋蔵』、『口入れ屋』、『代書』などを挙げることができる。しかし、船場という土地柄は、噺で特定の商いと限定してしまうと差し障りがあった、というような事情も考えられる。従って、「船場のさる御大家」というように、商いを特定しないような設定も必要であったと言えよう。

上図一で、親疎を「ウチ←→ソト」というように言い換えている。これは人物相関において、重要な尺度である。当主－番頭－手代－丁稚という垂直の階層構造があっても、同じ店の者という立場で身内意識が働く。手っ伝いは、半ば身内のようにでありながら、微妙な立場である。噺『千両蜜柑』では、冷蔵施設もない真夏の太坂で蜜柑を探してくるよう命ぜられたのは番頭であるが、『崇徳院』で若旦那が見初めた、名前も知れぬ相手を探すように頼まれたのは手っ伝いの熊五郎であった。

第二節 『百年目』

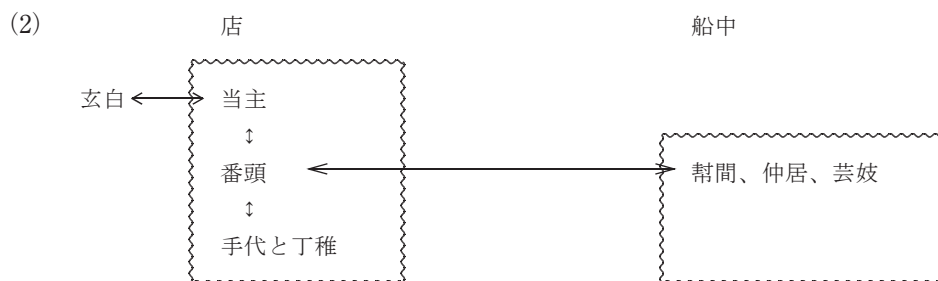
本節では、上方ネタ起源の『百年目』を扱う。この噺は船場の太店において、子飼いの番頭

が当主以下店一統に隠れてお茶屋遊びをしているという筋を巡って一大騒動が巻き起こる。花見の季節、途中で桜宮に舟を仕立てて散財に出かける場面が挟まれ、お茶屋噺の要素も盛り込まれる。その前後は店の中で展開する。店の中と船中で場面が転換することもあり、登場人物も多い。その顛末を簡略に紹介する。

- (1) 一. 番頭が、手代や丁稚ら店一統に小言を垂れる
- 二. 番頭が店を出て、舟を仕立てて桜宮に花見に出かけ、当主と遭遇する
- 三. 番頭が店に帰り、足が上がるや否やで一晩中煩悶する
- 四. 翌朝、当主の説諭があつて番頭は許される

場面一は、後に番頭自身が幫間の繁八に明かしているように、店を出るまでの時間稼ぎであった。しかし伏線として、小言を垂れる中で番頭はお茶屋遊びをした事が無い堅物であることを強調しようとしている。場面三で「足が上がる」とは、勤め人の不行跡などによって雇傭契約を解消し、身元引受人立ち会いの下でその手続きを執行することを指す。番頭は店に隠れてお茶屋遊びを続けていたのであるが春の一日、桜宮で花見をしようというので、舟を一艘仕立てて芸者や舞妓、太鼓持ちや仲居に声を掛けたのであった。番頭は、ごく内輪でお忍びというつもりであったのが、漏れ聞いたお茶屋の一統が「わてらも行く」と言いだし、屋形舟を仕立てるという大散財になってしまう。全編を通じて番頭が筋書きの中心になっているが、場面四は当主が一人語りで番頭を諭す聴かせ所である。結果論的には、番頭は足が上がりずに許されるのであるから、一晩中煩悶したのは無駄であり、これが噺全体を重苦しくもしている。以下は『米朝全集第六巻』からの引用である。

場面別での人間関係を図示しておく。左側は店におけるもの、右側は船中での散財場面である。上下に配置したのは、人間関係を相対的に示している。図で示した中に一人、「部外者」が存在する。医師の玄白老である。玄白老は当主と親しく、当日も連れだって桜宮に花見に出かけたのであった。医師という身分は、江戸時代にあっては非常に微妙であった。僧侶と同じように剃髪し、武士や町人とも異なる扱いを受けていたものと考えられる。『百年目』は明治期以降に作られた噺であるとしても、やはり医師の立場というのは独特であったと言える。当主は玄白老に対して、自分と同等の立場として遇しているように思われる。玄白老と当主二人が桜宮で番頭を見かけたのが騒動の発端であった。



商家は、当主－番頭－手代－丁稚というように、人間関係が明確な階層構造を形成している。

翌朝に当主が番頭に説論をする場面の前では、直接に丁稚に対して小言を垂れるという状況も設定されている。それに対して散財の場面は、客である番頭と奉仕する側の幫間・仲居・芸妓というのが平坦な人間関係にあるという分析をしている。幫間と仲居と芸妓が対話をするとなると、極端な年齢差などを除外すれば同等の立場でものを言い合うことであろう。

それでは場面別に、特徴的な発言を見てみよう。まず場面一は噺の冒頭で番頭が、お店ご一統に小言を垂れる場面である。丁稚から始まって、年嵩の手代へと順を追う。番頭は、夜に風呂に行ってから花街に繰り出して夜中に帰ってきた藤助に対しては、「芸者という紗は夏着るのか、冬着るのか、舞妓という粉は一升何ぼするのか、太鼓持ちという餅は焼いて食たら美味しいのか、ひと切れも味おうたことが無い」とお茶屋遊びも知らぬような堅苦しい風を装っているが、陰では一端の遊び人である。以下は番頭が手代の久七に対して手厳しい言である。

(3) 番「久七とん」 久「へえ」 番「何してなはる」

久「えー、岡山のお得意さんへちょっと手紙を書いとりますが」

番「ああ、お得意さんへの便りは欠かさんようにしとくなされ。じゃが、一昨日やったか、私がそこの引き出しを開けてみたら、四国のお得意先へ出す手紙が放り込んであったな。そんなとこへ放り込んだいて、先方さんへ届きますのんか」

久「えらいすんまへん、うっかりしとりました。あの、つい^{こども}丁稚の手があきまへなんだもんで……」

番「子供、子供で誰のことや。おまはんがこどもと違うか、ええ。肩揚げが取れて名前が変わったら立派な番頭さんやと思てなはるのか。ろくさま仕事もでけんくせに、図体ばかり大きくなって、ご近所の手前もあんまりみっともないさかい、わしが旦那さんをお願いして肩揚げ下ろしてもろたんや。ええ、おまはん何かいな、ご町内のお用いの送りに立つのと、ご親類へ年回を知らして回るのと、そのほかなんか一人前にでけることがおますか」

全体的に番頭が手代の久七に対して、怠業しているのを叱責している場面である。全般的に「便りは欠かさんようにしとくなされ、一人前にでけることがおますか」というように敬語で待遇している様子が窺えるが、内容は叱責である。これは意図的に、丁寧な言葉遣いをして相手との距離を取ろうとしたものであろう。久七は手代の中でも年長で、言葉遣いにも相応の配慮が必要なのであろう。対称詞としては「おまはん」である。次に同じく手代の喜助に小言を垂れる場面では「あんた」と呼びかけており、変化が見られる。いずれも卑尊度は中程度で、親近感を籠めた人称代名詞の選択である。自称詞は「私、わし」としている。

場面二で花見に舟で繰り出す段では、芸妓や太鼓持ちなど多様な登場人物が盛んに会話を交わす。まず番頭が店を出たところに、幫間の繁八が迎えに来ている。番頭が長々とお店一統に小言を垂れて店を出た途端に繁八が声を掛けたので、番頭は他人の振りを装う。番頭は隠れ遊びをしているので、小心者らしい言動を伏線として張っているのである。懐の広い当主と対照させる意図が窺える。繁八はなおも「何を言うてはりまんねんな。次さん、わたいだっじゃないかいな」と呼びかける。番頭の名が「次兵衛」であるところから、花街での呼び名は「次さん」というように工夫したのであろう。繁八は重ねて「もうし、次さんあんた、…」というように自称詞が「わたい」、番頭宛の対称詞が「あんた」である。対して番頭は「あほっ、気の利かん幫間やなあ、お前は」と応ずる。繁八は続く場面で、自称詞を「わて、わたい」と替えている。

番頭は当初、仲間内だけで内緒で花見をするつもりであったのが、話が漏れて一軒のお茶屋で「わてらに内緒で花見に行くとはけしからん。わてらも行くーちゅうて、い」と騒ぎが広がっていく。お茶屋の女将格の自称詞が「わて、わてら」である。舟に乗り込んでからも番頭は人目を憚り、「ああ、おいおいおいおい、そない障子開け放したらあかんがな、お前、ちょっと閉め、閉め」と障子を閉め切らせる。「お前」という単数形の対称詞であるが、これは船中に居る不特定多数の一統に対して、誰彼構わず口を衝いて出た一言であろう。桜宮に着くまで船脚が遅いので、船中が蒸してきた。番頭は「ああ、暑いと思たら誰や、こない障子ピシャーッと閉め切ってしもて」と気が付く。芸妓の一人が「あんたはんが閉め、閉め言うて、閉めさしなはったんやおまへんかいな」と言を挙げる。対称詞は「あんたはん」、「閉めさしなはった」と尊敬語補助動詞を用いている。

舟は桜宮に着くが、番頭は陸へ上がるのを避けている。お酌役を一人だけ残して、外の者は陸に上がつて花見をしたら良いという番頭に、「あんさんは」と誰かが問う。「そんなこと言うたかて、あんたこんなところへ放っというて、わたしらだけで花なんか見に行かれしまへん」という理屈である。複数形の自称詞が「わたしら」、対称詞は「あんた」となっている。繁八が、扇子で顔を隠して遊べば顔が露見しないというので番頭が陸に上がったところ、店の当主と鉢合わせしてしまう。その直前の場面、当主と玄白老が連れだって花見に来ている。当主は「玄白老、足はくたびれやせんかな」と気遣いを見せる。「玄白老」という呼びかけに、待遇表現としての配慮が見られる。続けて、玄白老が番頭を見かけて「もうし旦那さん、あそこで女子連中に取り囲まれて、肌脱ぎになって踊り踊ってんのん、お宅の御番頭はんと違いますか、あれ」と指摘する。当主は「何を言うのやいな、玄白老」と返す。玄白老は敬体で話しかけているのに対して、当主は常体で応じている。この辺り、待遇表現として敬体と常体の差は興味深い。当主と玄白老との対話は、商家の長と医者という社会的立場を弁えた上での言語活動であろう。当主と奉公人という絶対的な階層関係ではなく、互いに自立した立場ではあるが、身内ではないので相応の言葉遣いである。現代の常識に照らせば、患者と主治医という関係であれば言葉遣いも逆転して然るべきと考えられるが、近所付き合いで然程気を遣う間柄ではない、というように推測する。

当主と鉢合わせした後の番頭は「ああ、えらいことした、俺はもう去ぬ」と自称詞が替わっている。

店へ帰って一晩中煩悶した場面三、翌る朝に番頭は居ても立っても居られず、早起きをして表を掃除し始める。丁稚に「番頭はん、何してはりますねん。私がそれ掃除しますねん」と咎められて、「ほな、わい水打つ」と返す。「いや、番頭はん、わてが水打ちまんねん」と、多様な自称詞が飛び交う。

噺としての『百年目』は、番頭が花見に出かけて当主と遭遇した翌日、当主が番頭を呼び出して論争場面が聴かせ所である。年齢としては、当主は還暦手前の五十代、番頭は三十代ぐらいであろうか。親子ほどの年齢差があり、当主の貫禄を演出するのが噺家として腕の見せ所である。次は米朝師版からの引用である。

(4) 旦那「こんたの骨折りで毎年大福帳が一冊ずつ汚れていく。こんたの丹精じゃ、ありがたいこっちゃと思てる。(中略) こなた、一家の主を旦那と言うのは、どういうわけか知ってなはるか。知らん。そうじゃろな。この歳になるわしが今まで知らなんだんやさかい。(中略)

ところが、店へ出たら、今度はこなたが赤梅檀じゃ。店の若い連中が難蔴草やな。店の赤梅檀はえらい馬力^{ばち}で栄えてるが、店の難蔴草がちょっとグンニヤリしてへんかなあ。ええ、いや、こらわしの見違いじゃろとは思うが……もしも店の難蔴草が枯れるてなことがあったら、店の赤梅檀のこなたが枯れる。こなたという難蔴草に枯れられたら、この赤梅檀ひとたまりもないでな。(中略)

い、しかしおまはん、昨日器用なところを見せてもうたであれ。越後獅子やったかいなあれ、あの踊りの手つき、いつの間にあんなこと覚えたんや。器用なもんじゃったがな。(中略)

しかしなあ次兵衛どん。まあ、氣い悪してもろては困るが、い、昨日、帳面調べさしてもらいました。あんなところを見してもろたんで、もしも帳面に無理でもでけてないかと、わしゃ夜通しかかってあらまし調べさしてもらった。偉い人やなあ、こなたは、い。(中略)

しかし昨日は、相当うろたえてたとみえて、妙な挨拶をしたなあ、おまはん。なんや、長々ご無沙汰をしとりますとか、承りますればお店もますますご繁盛とか、い、妙なことを言うてたがだいぶ酔うてたんか」

番「いいえ、もう旦那さんの顔を見た途端に酒の酔いもなんにもきれいに醒めてしまいましたけど、あの時は、ああ申し上げるよりしょうがおまへなんだ」

旦那「なんでやいな」

番「あんなとこ見られた上は、こらもう百年目やと思いました」

番頭が初めて奉公に上がった頃というのであるから、数十年前の懷古談やら、「旦那」の民間語源を織り込んだりして、当主が一人で長々と喋っている。梵語の「だんな」は布施の意であり、ここでの語源説は民間語源で、この噺専用に拵えたものかもしれない。梅檀の木というのは実在する香木であるが、難蔴草という草はない。当て字である。この場面では語源の正確さは二の次で、当主－番頭－店の者という立場でお互いを支え合うという教訓を垂れるのが目的なのである。番頭としては、直に当主と話をするまで、足が上がるのかお許しが出るのか、測りかねていた。前夜はそれを考え抜いて、悩みに悩んでいたのである。しかし当主が話し始めてみると、どうやらお咎めはないようである。番頭は緊張しながらも、黙って話を聴いていたことであろう。これに先だって、丁稚に言いつけて番頭を呼びにやらせる場面で、「米の飯がてっぺんへのぼったとは、貴様のことじゃ」ときつい叱りようで、最も野卑度が高い対称詞として「貴様」になっている。

言葉遣いについて見ていこう。当主の自称詞は「わし」で一貫している。当主から番頭への対称詞は「こなた、こなた、おまはん」と三通りを遣い分けている。「あなた」が「あんた」に変化したのと同様に「こなた」が「こなた」になったのであるが、「こなた」の使用例は米朝師の語りでも、この『百年目』以外には見られない。撥音化によって、三音節三拍が二音節三拍に短縮化されている。卑尊度では「こなた－こなた－おまはん」という順で並ぶ。もう一点、同様の場面でも外の噺では類例を見ないのが、当主が番頭に対して「次兵衛どん」と名前で呼びかけている点である。上掲の長話に入る直前には「番頭どん」と呼びかけているが、名前で呼んでいるのは、この一回限りである。他の噺でも、番頭の名前を固有名詞として出している例はない。

人称代名詞以外では、「知ってなはるか」というように敬語が見られるのが特徴的である。当主が奉公人に話しかけているのであるが、尊敬語で遇しているのである。

ここで、これまで検証してきた人称代名詞について纏めてみよう。自称詞は比較的単純であるが、対称詞は誰が誰に対して発したかによって使い分ける必要がある。誰に対しての対称詞かは、括弧内に示す。

表一 『百年目』における人称代名詞の使用例

自称詞

話し手	自称詞
当主	わし
玄白老	
番頭	私 わし わい
手代と丁稚	
幫間、仲居、芸妓	わたしら わたい わて（ら）

対称詞

話し手	対称詞（相手）
当主	こなた、こんた、おまはん（番頭） 貴様（丁稚）
玄白老	
番頭	あんた、おまはん（手代） お前（船中）
手代と丁稚	
幫間、仲居、芸妓	あんた（番頭）

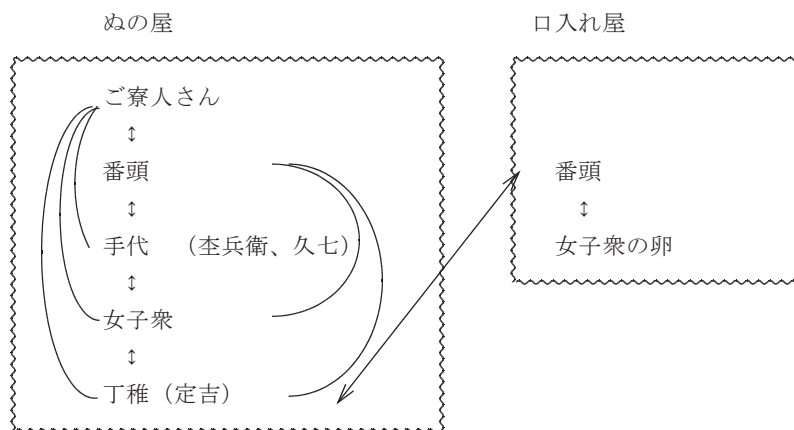
自称詞と対称詞を比べると、前者は場面に応じて使い分けるということは相対的に少ない。話し手が登場する場面が限られるとなると、自称詞も一種類か二種類に限定される傾向にある。しかし番頭の自称詞は、話し相手によって大きな幅を持たせてあった。年長である手合いに対しては「私」と丁寧度が高いが、丁稚に対しては「わいが水打つ」というように卑罵度の高い「わい」を用いた。「わい」は、悶々として一夜を過ごした翌朝のことで、平常の精神状態ではなかったというような事情が勘案されるべきかもしれない。当主の対称詞も、相手と状況によって卑尊度の幅が振れている。番頭に対して、「こなた、こんた、おまはん」と三通りである。「こなた」は敬度が高く他人行儀であるが、「おまはん」は親密さが籠められている。「こんた」はその中間であり、語形そのものが珍しい。丁稚に対しては、番頭を呼び出すように命じた折、番頭が「すぐ行くちゅうとけ」という言をそのまま伝えたため、その場合は「番頭さんはすぐ行くと言っていました」と言い直すように指導した場面で「米の粒が頭の天辺に回ったとは貴様のことじゃ」と懲罰的な言葉遣いである。

この噺は、船場の本店と船中や花見の場所という場面転換、お店での奉公人や花街の幫間、仲居、芸妓というように大勢の登場人物によって会話も変化に富んでいる。反面で、場面四における当主の一人語りでは、番頭を許しながら切々と論ずという難しい設定であり、演者自身に貫禄がなければ説得力を持たない。米朝師が「上方噺で最も難しい」と評した所以であろう。対称詞の「こなた、こんた、あんさん、あんたはん、あんた、おまはん、お前、貴様」という多様さは特筆すべきとも言えよう。登場人物の多さと人間関係の複雑さを反映していると考えられる。

第三節 『口入れ屋』

上方噺の中でも、最初から最後まで櫛りの連続、サゲも秀逸で屈指の爆笑ネタと言えるのが『口入れ屋』である。口入れ屋とは職業の周旋業で、丁稚や女子衆、板前などそれぞれに専門があったようである。職を求めるものが店に赴き、遠くから出てきた場合など職が決まるまで逗留したりして待つということもあったという。求人する側も店に赴き、好ましい人物を探す。求職者は求人側の店に赴き、「目見え」と呼ばれる面接のような手続きを経て、試傭期間に入る。口入れ屋は、求職者が退職するまで身元保証人の役も担う。

この噺は「ぬの屋」という古着屋が女子衆の周旋を口入れ屋に頼むという筋になっている。冒頭、口入れ屋で女子衆の職を求めて年頃の娘が集まっている様子が活写される。それも含めて、両家の人間関係を示す。



図二 『口入れ屋』における人間関係

以下の節でも同様に人間関係を図示するが、これほどまでに入り組んでいる噺は見当たらない。ぬの屋の中で、種々の階層を結んで矢印や半円を描いているが、それだけ会話が重層的になっているという証左である。手代の内で筆頭の二人は、二番番頭と三番番頭として遇されている。ここから推量すると、二人の他にも手代が居るであろうし、丁稚も手代と同人数程度は奉公していると考えられる。特筆すべきは、ご寮人さんの存在である。当主が出てくる噺が多いのは当然であるが、ご寮人さんがお出ましになることは少ない。加えて、目見えに来た女子衆とも話をしている。上方噺には女性の登場人物そのものが少ないので、女性同士の会話というのはごく珍しい。他に思い当たるとすれば『お文さん』ぐらいであろう。口入れ屋でも奉公先を求めて集まっている娘たちがわいわいがやがやと喋っている場面があるが、これは脇筋である。マクラで説明する場合もあるが、女子衆は半期の出替わりである。双方が合意すれば更新して長く勤めることもあるが、基本は半年ごとの更新であったようである。それ故、女子衆専門の口入れ屋は回転が速かったことであろう。毎年四月と十月は女子衆の出替わり月で、「前垂れ被り」をした女子衆が船場界限を行き交うのが風物詩であったという。「前垂れ被り」とは、

雨が降ってくると前垂れを傘の代用として着物が濡れないようにすることを言う。年代を推定してみよう。ご寮人さんは、「お子達が手習い」と言われているところから四十歳前後、番頭は三十代半ば、手代の壱兵衛と久七は二十代半ば、女子衆は二十歳過ぎ、定吉は十代前半という辺りが妥当なように思われる。こうして概観してみると、各階層の年代配別は絶妙である。十代から四十代まで広くばらついており、その中でも未婚で結婚適齢期の男女が伏線となって、騒動を巻き起こすのである。

それでは上掲の人間関係図に即して、嘶で繰り上げられる会話を順に並べてみよう。

- 一. 口入れ屋で番頭が娘達に、希望の奉公先を尋ねる
- 二. 口入れ屋に布屋の丁稚が女子衆を一人頼みに来る
- 三. 口入れ屋から定吉が女子衆を連れ帰る
- 四. 布屋の番頭が女子衆と給金の決めをする
- 五. ご寮人さんが女子衆と面談し、個人的事情を訊き出す
- 六. 定吉が番頭に、女子衆の個人的事情を注進し、店が早終いになる
- 七. 早終いの後、就寝までの一騒動
- 八. 就寝後、番頭以下三人がお忍びで二階に上がろうとする
- 九. ご寮人さんが見回りに来て、サゲになる

以下では、待遇表現として特徴的な会話を抽出して分析する。

まず口入れ屋で番頭が娘達に奉公先の希望を尋ねる場面である。番頭は「お前ら、ちいと、おさまってくれること考えないかね」と註文を付け、一人一人に「そこのお子、おまはんはどんなところへ行きたいな」と尋ねていく。全員に呼びかける折は「お前ら」と十把一絡げであるが、一人宛には「おまはん」と多少は丁寧度が上がる。娘達の自称詞は「わて、あて」で、身勝手な希望ばかり言い募っているところへ、定吉が「口入れ屋のおっさん」と入ってくる。番頭は「ほら来よった、布屋の丁稚や。かなんのや、お前とこの註文は、ええ」と本音が出る。「来よった」というのは補助動詞「よる」で、軽度の卑罵語的意図を含んでいる。これまではご寮人さんの計らいで、余り別嬪でない女子衆を選んで、家内が揉めないようにしようとしていたのであった。ところがこの度は、その番頭に思い入れがあって、別嬪の女子衆を選んできるといふようにという使命を帯びている。二人して女子衆を選ぶと、番頭は「ああ、話が決まったら、わしが証文をまきに行くさかいな」と自称詞「わし」になっている。「証文をまく」とは周旋の契約書を作成することであり、雇い先に対しては身元引き受け證を兼ねるものである。

定吉は女子衆を連れて店に戻る道中、ごちゃごちゃと喋る。女子衆の名は、最後まで出てこない。定吉の自称詞は「わて、わたい」で女子衆への対称詞は「あんた」である。「あんたみたいなきれいなお人、おさまること間違いおまへん」と請け合う。二人が店に帰った折、定吉は「へい、番頭はん、ただいま」と挨拶する。番頭は「これ、使い上手というのは貴様のことじゃ。外でせんど油を売って、うちへ入る時だけばたばた一と駆けこんで、どこへ行てたんや」とご立腹である。定吉への呼びかけが「貴様」と極端であるが、自らが口入れ屋に使いに出したことを忘れていたようである。終助詞「じゃ、や」が見られる。定吉は「かなんなあ、どこ行てたやなんて。あんたの用事で口入れ屋はん行てましたんやないか」と返す。

四番と番号を振ってある場面は、番頭が給金の決めと称して女子衆と話し込むのであるが、

実態は番頭が一方的に喋るばかりで女子衆は相槌も返していない。丹波の園部から来た、おもよどんという先例を引いて古着屋としての余得で帯を原価の五円で売る、また親の病で困った折に十円という現銀を融通して、いずれも分割払いにしておいて、最後は「帳面は筆の先でどがちゃが、どがちゃが、どがちゃが、い」と完済せずに有耶無耶にになってしまう手練手管を一人でまくし立てている。要は、そのような差配ができるのは自分一人であるから、「魚心あれば水心、水心あれば魚心」と持ちつ持たれつの関係を仄めかせているのである。「実はわしにひとつ悪い病気があってな、なんじゃ、夜中に寝ばけるといふ癖があるねん。手水に行た帰りなんか、間違うて他人の寝間へ入るてなことが、ちょいちょいあるんやそうな、うん」というような因果を含めて、寝所に忍び寄るということを匂わせる。ところがこの時点で、女子衆はご寮人さんと話をするために奥に入っていたのであった。

この場面転換で、ご寮人さんが定吉に一言だけ問い詰める（第三巻）。その後は続けて女子衆に個人的事情を尋ねる。その移行は極めて自然である。想像してみると、定吉への質問は一言で終わっている、その後に女子衆とご寮人さんが話し始めた折りに定吉がどうしていたかは説明がない。定吉がその場に留まるというのも不自然であるから、その場から離れて立ち聞きしていたと考えるべきであろう。

(5) 寮 「わてがあれほど言うといたやろ。^{うち}家は若い男の人が大勢いてるさかい、なるべく不細工な女子衆さんと呼んどいなはれ言うてるのに、なんでこんな綺麗な人連れてきたんや」

定 「(中略) 今年は梅雨によろ降って土用に照りこんださかい、どことも女子衆の出来がええのやて」

寮 「お米やがな、まるで。ようそんなこと言うてなはる。……ああ、あんた気い悪してもろたら困りますけどもな、家は若い男が大勢いてるよってに、ちょっと綺麗な人が来たら、もう家ん中がごじゃごじゃもめて、うるそうてしょうがないのやわ (中略) そやけど上^{かみ}を勤めてもらうとなると、ちょっとお針が持てないかんのやけど、あんたお針のほうはどうや」

女 「まあ御寮人さん、お針のことなど言われますと、穴があったら入りたいように存じます。亡くなりました母親から、ちょっと手ほどきを受けただけでございますので、ただもう…… (後略)」

寮 「まあ、そないなお子にいててもろたら、わても安心やわ。あんた、生まれはどちら」

女 「生まれは京でございまして」

寮 「京都か、はあ、さよか。京はどちら」

女 「寺町の万寿寺で」

寮 「まあ、賑やかなところやないか、ほいでご両親は今でもそこにいてやんのか」

女 「私はまことに肩 (運の意) の悪い者でございまして、両親は幼い時に死に別れまして…… (後略)」

ご寮人さんは、定吉に対しても女子衆に対しても、同等の言葉遣いで遇しているように思われる。自称詞は「わて」で、対称詞は二人に対して「あんた」を用いている。「梅雨によろ降って土用に照りこんださかい、どことも女子衆の出来がええのやて」というような荒唐無稽な定吉の申し開きにさえ、「ようそんなこと言うてなはる」と尊敬語を用いている。「両親は今でもそこにいてやんのか」というのも、女子衆の家族に当てた尊敬語である。女子衆が上の勤めー

—当主家族の世話をする—をするについて、針仕事から始まって、当主に酒が入った折に三味線で興を添えるやら、子供に手習いの手本を書くやら、というような事柄を聞き出す。この辺り、就業規則などある筈もない時代背景に加えて、現代であれば履歴書に書くか書かないか微妙な余芸の部類について談義しているのである。ここで女子衆は、余り本筋には関わらないのであるが、諸芸万般一通り身に付けた女性であるということを聴き手に刷り込むのである。そして家族構成など個人的な事情に触れたときに、女子衆はその晩から泊まり込みたいとお伺いを立てる。通常は目見えの日は一旦引き取って、後日改めて奉公に上がるという手順を踏むのであるが、ここでは例外的に、その晩から住み込みたいというのである。定吉は番頭に注進する際に「寺町の万寿寺」を「寺屋の饅頭屋」と言い、「おかしな商売やな。そんなけったいな商売あるのんかい」と訝られる。同様に「心斎橋の八幡筋」は「心配なしに鉢巻き」と聞き取って注進に及んでいる。

定吉が番頭に「今晚から泊まらほりませ」と注進したところから、番頭は店を早終いすると即決したのであった（会話編の六）。女子衆の目見えというので店を早終いにする理由には当たらないのであるが、番頭には魂胆があった。早終い→夕食も早く済ませる→早寝という算段であったのが、焦る余りに途中を素っ飛ばしてしまう。大戸を閉めて、灯明の火を消させると、「消したら寝ようぞ」と言う始末である。「まだご飯食べてまへんやないか」と抗議されると、「いっぺんぐらい飯食わなんだというて、どうや」とまで言うのである。枝雀師の口演では「さあ喰え、早よ喰え、さあ喰え、早よ喰え」、「さあ寝え、早よ寝え、さあ寝え、早よ寝え」とけたたましく急かしている。

こうして番頭が皆を無理矢理寝かし付けたのであるが、空兵衛と久七は隣同士で寝物語である。その中で久七は、昼間に女子衆と交わした会話を再現して聞かせる。女子衆は、京言葉である。漬け物石を持ち上げるのに難儀していた女子衆に、久七が手を貸す場面である。

(6) 女 「おおきに、はばかりさんどす、率爾ながらお名前は」

久 「久七と申します」

女 「まあ久七さんと聞いたらお懐かしゅうございます」

久 「はあ、あんた久七が懐かしい、そういうところを見ると、あんさんには久七さんというかわいいお人がいてはりまんねんなあ、ええ。それやったら、わたいが何ほど思ってもあきまへんなあ」

女 「いいえ、私はこう見えてもいっぺん縁づいたことのある体でございます。その夫に死に別れてかようにご奉公しておりますが、その死に別れた夫の名が久七というので、でまあお懐かしいと申し上げたようなわけでおます。お気にさわったら堪忍しとくれやす」

二人は初対面であるから、まずは他人行儀な物言いである。久七から女子衆への対称詞は「あんた」と「あんさん」の併用であるが、「あんさん」の方が丁寧度は高い。ここで久七は、女子衆に気のある素振りを明言している。女子衆の応対は、身の上を語りながら、やんわりと久七の思いを拒んでいるようである。「ございます、堪忍しとくれやす」というように、全般的な言葉遣いの丁寧度は高い。しかしその後、お互いの尻がぶつかったので女子衆は久七に「まあ、わてのお尻が大きいと言うたかて、何もそうお突きやへえでもええやおへんかいな」と言う辺り、「はばかりさんどす」というのと共にいかにも京言葉らしい。ご寮人さんと長話をし

ていた折には京言葉は然程出ていなかったのも、特徴的である。そして肝腎なのは、この会話再現は久七が空兵衛に対して語っているという点である。

ここから噺の終盤にかけて、船場商家の習慣や間取りが関わってくる。女子衆の寝所は二階で、番頭以下丁稚までは階下と分けていたようである。階段は、「ごろごろの戸」という仕掛けで、行き来が出来ないように施錠も可能であるという構造であった。この晩も、ご寮人さんの手配で施錠されていたのである。最初に目を覚ました空兵衛は二階に上がろうとして、ごろごろの戸で頭をぶつける。そこでは「台所へ回って、膳棚足掛かりに木山から抜けたら、チャリ（たやすいことの意）みたいなもんや」と見当を付ける。木山というのは、元来は薪を収納しておく場所で、二階まで吹き抜けになっていた。そこに、店の者が用いる箱膳を積んでいたのである。積み重ねてある箱膳を登って二階に行こうと見当を付けたのであった。しかし膳棚を支える腕木が腐っていたので、足を掛けた途端に棚が崩れ落ちてきた。「……さあえらいことになったぞ、これは。こんなもん担げてしもたら、これ……」と途方に暮れながら、膳棚を担げ続けるより他に選択肢はなかった。次に目を覚ましたのが番頭で、同じようにごろごろの戸で頭をぶつけ、膳棚に足を掛ける。空兵衛と同様に膳棚を担げることになり、二人は次のように対話する。

(7) 番 「……下には下ろされへんし、放したらえらい音がするし……ああこんなとこ見られたら番頭の値打ちも何もあらへん。なんでこないぐらぐら動くのやろ」

空 「そこへお越しになったのは、御番頭はんのようでおますけども、番頭はんと違いますかいな」

番 「そういう声は空兵衛どんか。ちょっとすまんけど、手エ貸して」

空 「それが、なかなか貸せんわ。わたい、こっち側担げてまんねん」

番 「おまはん、そっち側担げてんのんかいな。……ほたら二人して膳棚担げてんのんか」

仕草では、空兵衛と番頭は右と左から膳棚を担げているので、話し手が交替すると肩も入れ替える。実に滑稽な図であるが、当人にとっては抜き差しならぬ状況である。空兵衛からの呼びかけは「(御) 番頭はん」と丁寧である。番頭からは「空兵衛どん」と呼び、対称詞は「おまはん」である。

三番手は久七である。前二人と異なり、井戸の上から天窓の紐にぶら下がり反動を付けて木山に駆け上がろうと算段した。目論見はこれが最善であったが、天窓を閉め忘れていたために、紐に体重を掛けた途端に台所の井戸に落ち込んだ。膳棚が崩れたことと言い、天窓からぶら下がっている紐に身を預けたことと言い、いずれも想像の産物であるが、そこは作り話である故、如何様にも展開できる。番頭が「誰や井戸にはまりよったで、おい。えらいことになってきたがな、こら」、空「どないなってまんねん」という応対の後、久七は「そこらでお声をするのは番頭はんには空兵衛はんのようでおますけど、ちょっと引き上げてもらうわけにはいきまへんやろかな」と懇願する。三人が台所で大声を出していると、ご寮人さんが気付いて、サゲに入る。

空兵衛が「えらいこっちゃ。ご寮人さんが下りてきやはった」と慌てている所を見ると、ご寮人さんも二階で就寝していたらしい。番頭は「もう間に合わん。立ったままいびきかき、立ったままいびきかくねん。ゲー」と他の二人にも指図する。ご寮人さんは台所へ入ってきて、ま

ずは天窓から井戸の中へ紐が落ち込んでいるのに気が付き、井戸の中を覗き込む。「……………誰やそこにいるのは、あんた久七と違うか。久七やないか、何をしてなはんねん、そんなとこで」と呆れている。久七の返答は「ええ、ちょっと西瓜の身振りをしてま」という、その場しのぎであった。ご寮人さんは「しっかりつかまっときや、今お店の人に頼んで上げてもらうさかいな。あの、ちょっと、お店の……………まあ、お店総出やないかいな、もう」と手燭を翳して、膳棚を担げている二人に気が付く。米朝師の口調は怒っているようであるが、枝雀師は呆れて声を潜めている。ここは枝雀師の演出が勝る。「番頭に空兵衛、膳棚担げていびきかいて、何をしてなはんねん」という問いに、「へえ、宿替えの夢を見とおります」と空兵衛が答えてサゲになっている。奇抜な発想で、ちょっと思いつかないような秀逸なサゲである。膳棚を担げている仕草は、宿替えをしているとしか釈明のしようがなかったものであろう。

木屋という古着屋で、当主ではなくご寮人さんが大きな役回りを演じている。女子衆との面談場面は、同性同士の会話という貴重な例であった。サゲでの「何してなはんねん」という言葉遣いのように、奉公人に対しても、それなりに配慮した待遇表現を用いている様子が窺える。

ここで、噺『口入屋』における人称代名詞の使用を表に纏めておく。

表二 『口入屋』における人称代名詞の使用例

自称詞

話し手	自称詞
口入屋番頭	わし
女子衆の卵	わて あて
定吉	わて
女子衆	私 わて
番頭	わたくし わし
ご寮人さん	わて
空兵衛と久七	わたし わたい わて

対称詞

話し手	対称詞（相手）
口入屋番頭	お前（女子衆の卵、定吉）
定吉	あんたはん（神棚）あんた（女子衆の卵、番頭）
番頭	おまはん（女子衆）お前ら（丁稚） 貴様（定吉）
ご寮人さん	あんた（女子衆、久七）
空兵衛と久七	あんた（互い）

ご寮人さんから番頭、手代、丁稚と店の者は総動員である。加えて、口入れ屋の場面では番頭と女子衆の卵がわあわあと喋っている様子もある。自称詞では「わて」が男女共用で広く用いられている点が目立つ。番頭が女子衆と給金の決めと称して長々と一方的に喋っている折りに「わたくし」と自称しているのは、多分に気取りが見られる。自分が店の実務を取り仕切り、実権を握っているというところを誇示するかのようである。対称詞では、定吉が神棚の灯明を消す際に「あんたはんもえらいご災難でんなあ」と話しかけているのが面白い。野卑度が高い

「貴様」というのは、自分が口入れ屋に遣いに出した定吉の帰りが遅かったので、「使い上手とは貴様のことじゃ」とうっかり詰っている場面である。

第四節『質屋蔵』と『崇徳院』

次に、商家を舞台とした噺でありながら、「手っ伝い」と呼ばれる出入り職人が登場する『質屋蔵』と『崇徳院』を採りあげてみる。手っ伝いとは、大抵は当主が所有する長屋に住まいし、平生は自身が請け負う大工仕事などで生計を立てている。本職の大工や左官ではないにしても、片手間に簡単な修繕などを引き受けるのである。その他に、使い走りなど細々とした用事をこなして、生計の足しとしていたようである。雇う側からすれば、常雇いではなく用事のあるときだけ頼んで手間賃を渡せば良いので、都合の良い存在である。手っ伝いは、当主－番頭－手代－丁稚という階層構造には属さない、外部の存在である。しかし長屋の店子でもあり、半分身内でもあり、微妙な立場である。

『質屋蔵』

噺『質屋蔵』（第六巻）は、質屋の蔵に出ると噂される化け物を見届けるについて、臆病者の番頭が手っ伝いの熊五郎に助太刀を頼むというのが筋立ての中心である。まずは事の成り行きを説明するのに、当主が縹子の帯一本を例に出して話し始めるのであるが、これが長大な独話である。所々で番頭が相槌を挟むが、当主は延々と話し続ける。「こないなこともあるで」という譬え話なのであるが、話術の面白さで番頭も思わず聞き入ってしまう。風呂敷を担い、家々を廻って古着などを売っている呉服屋から、長屋の妻女が縹子の帯を、掛け値なしの六円で買うことになる。元々は質屋の当主が一人語りで想像しているのであるが、この段を背負いの呉服屋と長屋の妻女が会話しているように再構成してみた。

(8) 呉「まあいっぺん見てもらいまっさ」

妻「あほらしい、そんなもんあんた、見せてもろたかて買えるような所帯やなし、目の毒やさかい」

呉「何を言うてなはんねんな。こちらはんで商売しようと思てえしまへんがな。見るは法楽、ただでおます」

(ト書き：妻女が縹子の帯に目を留める)

呉「ところでお家、こういう帯はどうでおます。これは流行り廃りがあるもんやおまへん。一本手元に置いといていただきましたら、末長うお役に立つはずでございます。えー、これはな、よそでお買いになりましたら、ま、安うて十二、三円、間違うても十円切って手に入るもんやないが、こちらさんで私がこうやっていつもお弁当つかわしてもろたりしてます（後略）」

ここでも、呉服屋は長々と一人で喋って帯を置いていこうとする。妻女から呉服屋への対称詞は「あんた」、呉服屋の自称詞は「私」となっている。その他、呉服屋から妻女に呼びかけるのに「お家」という普通名詞を用いている。また、「こちらはん、こちらさん」とは妻女宅を指している。

家計が豊かでない妻夫にとっては六円というのは、清水の舞台から飛び降りるような買い物

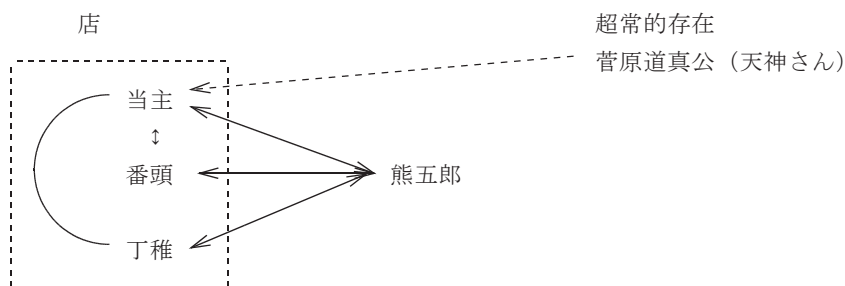
であるが、成り行きである。妻女は実際の買値六円を、亭主に五円と偽る。亭主はその五円を母屋から借り入れて妻女に渡す。その後、家計に困った折にその帯を三円で質入れしたのであるが、妻女が患いついてしまう。妻女は息絶える間際、実の妹に形見としてその帯を渡したいと思うのであるが、「わずか三円という金のためにあの質屋に取られて、あんたに形見一つあげることがでけん。思えば恨めしいあの質屋、、、」と言い残すという結末になる。当主は「、、、と、恨みがここへくるんや、わかったあるか」と長広舌を回収するのである。全てが空想での作り話であるが、当主の話術で聞き込ませる。番頭は「、、、なんとえらいもんでやすなあ、もうし。帯一本にそれだけの」と感心する。当主は「さあいな、思わず知らず人の恨みを買うてることがないとは言えん、というのはこのことや」と引き取る。三円で取った襦子の帯一本だけでもこれだけの背景を思い描いているのであるから、三番蔵全体ではどういう事になるか、想像するだに恐ろしいというのが当主の理屈である。

これは、近所の噂話で「質屋の三番蔵に夜な夜な化けもんが出る」というのを耳にした当主が、番頭に命じて真偽を確かめさせようとして話をしているのである。「もしも何かがあった時は、おまはんの胸一つにおさめてもらうように、あんた一人で、、、」と因果を含める。同じ文中で対称詞が「おまはん、あんた」と併用されている。番頭は「、、、私、十三の年にご当家へ奉公いたしまして、来年か再来年、暖簾分けやおっしゃってくださいましたが、今晚これを一人で見届けんならんようでしたら、ひとまずお暇をいただいて、大和の親元のほうへ帰らしてもらいます」と、至って臆病である。それを聞いた当主は、「ちょっと待ちいな、これ、、、お前えらい恐がりやな」と対称詞は「お前」に変わる。

番頭は「誰か助太刀があったら、、、」という条件を付け、手っ伝いの熊五郎なら強いこと請け合いと話が進む。話が決まって丁稚を使いに立てようと閉めていた襖を開けたところ、定吉がそこに立ち尽くしていた。定吉が「わて、あの、何も立ち聞きしてえしまへん」と申し開きするところを、すぐに熊五郎宅へ使いに行くように急かす。「立ち聞きしてえしまへん」というのは、単に「立ち聞きしてまへん」という単式叙述ではなく、拙著『上方落語にみられる待遇表現』第三章第三節で複式叙述と定義した形式であり、統語構造が複雑である分、丁寧に聞こえる。定吉を見つけた番頭は、「、、、立ち聞きしてたんやがな、こいつ」と卑罵語の他称詞「こいつ」になっている。

熊五郎は呼び出された理由を尋ねるが、定吉の返答は要領を得ない。例えば「旦那さんが風呂行かはりましたん。そしたら番頭はんが、「旦那さんがどないしても風呂行かはんねやったら、私はおひまもろて大和の親元に帰らしてもらいます」という具合である。話があちこちに飛んだり、訳のわからない省略をしたりするので、一向に要領を得ないのである。辛抱を切らせた熊五郎が「旦那はなんで怒ってはるねん」と問うのに、「なんや知らん。丁稚ちゅうものは立ち聞きしたらいかんねん」という返答であったので、「、、、何を言うてんねん、お前」と返す。対称詞は「お前」である。定吉は立ち聞きした当主の長話を再現するのであるが、それが前後関係も入り乱れて全く意味が通じない再現になっており、笑いを誘う。ここで熊五郎が、呼び出された真の理由を理解し損ねたことが、後の伏線になっている。定吉が回想した当主の長話が支離滅裂であったことを際立たせるためには、その長話の細部をきっちりと伏線として張っておく必要があるのである。

ここで、人間関係を図示しておく。



図三 『質屋蔵』における人間関係

店の内部が身内であることは当然の前提であるが、手っ伝いの熊五郎は半分は身内というような微妙な立場である。それ故に、店側の三者は点線で枠を囲んである。この登場人物四者間では、番頭と丁稚の定吉が直接に話をする場面はない。菅原道真公は、サゲで一言だけ発するという超常的存在である。

熊五郎が店に赴いたまでは良かったが、呼ばれた理由について、尋ねられもしないのに自分一人で合点して、べらべらと喋り出す。店に届いた灘の酒四斗樽や漬け物の樽をそれぞれ一丁持ち帰ったことなど、自分で白状してしまう。前半で当主が襦子の帯について譬え話を作り出したのと好対照である。そこでは熊五郎は自称詞を「わたい、わて、私」としている。当主に対しての呼びかけは「旦那」というのが一度だけで、対称詞としては出現しない。当主から熊五郎への対称詞は「おまはん」である。有無を言わずに当主が要件を依頼し終わった時点で番頭が顔を出す。熊五郎に対しては「わたいあんた頼りにしてまんねやがな」という言葉遣いである。熊五郎にしてみれば、常傭契約ではないものの、何かと雑用を頼まれたりする関係であるから、当主にも番頭にもそれなりの待遇表現を心得ているものであろう。

番頭と熊五郎が三番蔵の番に着いてからは、飲食をしながらの世間話などという場面に転換する。熊五郎は、酒が飲めない番頭に勧める。

(9) 番 「わたいなあ、お酒飲めまへんねん」

熊 「ああ、そうでしたんやなあ、うーむ。お店御一統で飲めんとか………ほんなあ、ご馳走のほうを食べとおくなはれ。私一人でやらしてもらいます………こんなところでお酒飲めなんたら困ることも多い」

番 「さあ、私もなんとか稽古しようと思たんですけど、どういうわけか昔からお酒をよう飲まん」

熊 「そら気の毒でんなあ。ほなあ、私一人でよべれます（中略）どんどん食べなはれや、あんた遠慮せんと、ええ、ひょっとしたらこれがご馳走の食べじまい」

番 「………そんなこと言いなはん、あんた。そんなこと言われたら食う気にならん」

熊五郎は毎晩二合の晩酌を楽しみにしており、この晩も二合徳利を一本宛がわれた。しかし酒飲みの心理として、一人で飲んでいるよりは誰かと一緒の方が楽しい。そこで番頭に勧めたのであるが、体質的に受け付けないという。熊五郎は「ほなあ、一人でよべれます」と返す。「よべれる」というのは飲食に共用の謙譲語で、「ご馳走になる」という意である。

空腹も満たされ、夜が更けて二人がこっくりこっくりと居眠りを始めた頃、蔵から火の玉が出てくる。腰を抜かした二人に代わって当主が蔵の様子を覗いたところ、質草にしていた天神さんの掛け軸から、当の菅原道真公が抜け出てくる。〈ドロドロ〉という鳴り物に続いて、〈楽の合方〉というお囃子が入る。天神さんが「そちや当家の主なるか。質置き主に、とく利上げをせよと伝えよ。どうやらまた、流されそうなわい」でさげる。尊大語で対称詞が「そち」となっている点が面白い。

ここで、噺『質屋蔵』における人称代名詞の使用を表に纏めておく。

表三 『質屋蔵』における人称代名詞の使用例

自称詞

話し手	自称詞
当主	わし
番頭	私 わたい わし わて
呉服屋	私
妻女	わたい
亭主	わし
定吉	わて わい
熊五郎	私 我々 わたい わし わて

対称詞

話し手	対称詞（相手）
当主	あんた、おまはん、お前（番頭）お前（定吉）
呉服屋	お家（妻女）
妻女	あんた（呉服屋、亭主、妹）
亭主	お前（妻女）
熊五郎	あんた（番頭） お前（定吉）
番頭	あんた（熊五郎）
菅公	そち（当主）

この中には、実在の人物として喋っているのではなく、当主が作り話で繻子の帯を巡る筋書きを拵えた呉服屋や、長屋の妻女やその亭主、妹も含まれている。しかし噺というのは元々演者が一人で何人をも演じ分けていたので、それは質屋の当主が話しているようで、呉服屋なり長屋の妻女の語り口そのものである。そして特筆すべきは、サゲで掛け軸の菅公が絵から抜け出して当主の前に出現し、「どうやらまた流されそうなわい」と嘆く段である。「また」というのは、讒言によって九州に流されたことを勘定に入れているのである。超常現象を演出するのに、鳴り物が効果的である。天神さんとして全国に祀られている威儀と、サゲの哀れさとの落差が大きいところが面白さの元であろう。

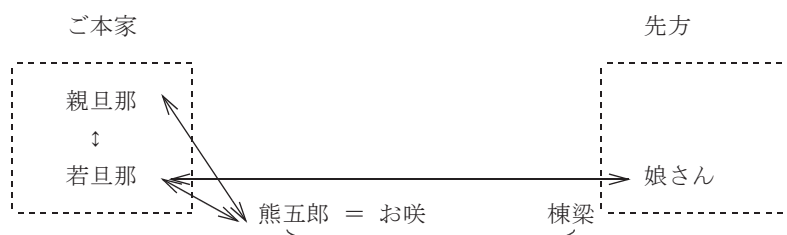
上表では全般に多様な人称代名詞使用が見られるが、特に番頭と熊五郎の自称詞、当主から番頭への対称詞が場面に応じて使い分けられているのが目立つ。番頭は当主の前では「私」、熊五郎とは「わて」と言い分けている。同じように熊五郎も、「私」から「わて」まで幅がある。

「我々」というのは、一般論として仲間内で集まって酒を飲むような折は、爛冷ましが出るような勿体ないことにはならない、という場面での用法であった。当主は三番蔵の噂を確かめて貰おうと、番頭一人に見届けてもらうつもりであった。しかしそれを告げたところ、番頭が「お暇をいただいて大和の親元へ帰らせてもらいます」とまで言うので、「お前えらい恐がりやな」と、それまでの「おまはん」から変化が見られる。

全体として、蔵に化けもんが出るという噂が真実であったという線に沿うように筋書きが展開しており、一種の怪談仕立てではある。しかし当主や熊五郎の独話、番頭と熊五郎の掛け合いなど、話術の面白さが詰め込まれたネタでもある。独話の長話も、だれることなく聞き手を引き込むような造作になっている。

『崇徳院』

手っ伝いの熊五郎が登場する噺として、『崇徳院』（第四巻）は『質屋蔵』と似たような人間関係という側面がある。しかし『崇徳院』では、ご本家が親旦那と若旦那で構成され、奉公人は登場しない。この若旦那が高津神社にお詣りした際に、どこの誰とも知れない娘さんに思いを寄せて、余りの事に床に伏せる。若旦那は純情で、この事情を親にも言えずに病は悪化する。幼馴染みの熊五郎になら話すというので、熊五郎が呼ばれる。そこで熊五郎は、どこの誰とも知れない娘さんを探し出すという無理難題を頼まれる。苦労の末に、先方でも同様に相手を探していた出入りの棟梁と遭遇することができ、大団円を迎える。この人間関係を、次に示す。



図四 『崇徳院』における人間関係

恋しいという古風な設定になっているが、本家と先方というのは、その当事者である。若旦那と娘さんは高津神社の参詣で出会い、一目惚れしたのであるという点では自由恋愛であると言える。この図からも知られるように、狂言回しの中心は熊五郎である。しかしそこから先に婚礼まで話を進めるとなると、家同士の付き合いになる。『崇徳院』では、当事者同士がどこの誰とも知れないので、まず相手を探すという段が噺の中心になっている。以下では場面を分けて、筋立てを追うことにする。

- (10) 一. 熊五郎が呼ばれて若旦那から事情を聴き取る
- 二. 熊五郎は親旦那に事情を話し、相手を探すように頼まれる
- 三. 熊五郎は大坂中を探し回る
- 四. 苦労の末に相手方の棟梁と遭遇し、一件落着となる

場面一、熊五郎が呼ばれて若旦那から事情を訊き出す段では、まず親旦那が熊五郎に経緯を説明する。その場面は親旦那が一人で喋っているのであるが、それをそのまま再現すると「全体こなたは誰になら言うのじゃと訊いたら、熊はん、お前になら打ち明けると言うのや。親にさえ言えんことを他人に、とは思うたが、親にはかえって言いにくいのかもしれん」と中間話法になっている。恐らく、若旦那が返したのは「熊はんになら打ち明けると言う言い方であつたろう。「お前」というのは面前に居ない限り発しにくい。親子間での対話はここだけで、しかも親旦那が熊五郎に事情を説明している中での間接的再現である。親子でありながら、対称詞は「こなた」と丁寧度が高い。親旦那の自称詞は「わし」で、熊五郎への対称詞は「お前」と「おまはん」の併用になっている。

このようにあらましを頭に入れておいて、熊五郎は改めて若旦那から事情を聴き取る。若旦那と熊五郎の対話では、熊五郎の自称詞は「わたい」で若旦那への対称詞は「あんた」となっている。「熊五郎でおます」と挨拶し、「あんた思うてはりまんねんやてな」と病態を伺う。手っ伝い身分として言葉遣いに配慮している様子が窺える。若旦那の自称詞は「私」、熊五郎への対称詞は「おまはん」である。少し後には「お前」となる。当然ながら、待遇表現としては非対称である。事情を説明する中で、若旦那が先方の娘さんに、茶店に忘れてあった緋塩瀬の茶袱紗を渡す際に「これあんたはんのと違いますか」と声を掛けている。対称詞は「あんたはん」と敬度が高い。恋患いの当事者二人が交わした会話というのは、これ一言である。しかも先方は返答をした様子はなく、代わりとして「瀬を早み、岩にせかるる滝川の」と、崇徳院御製上の句を認めて若旦那に渡したというのである。これが元で、若旦那が患いつく。後に明らかになるが、先方も同じように床に付いて明日をも知れぬ命となって家中で相手を探していたのである。

場面二から三への転換点において、熊五郎は一度自分の家に立ち寄る。そこで妻女に子細を申し聞かせるのであるが、逆に「日本国中、縦横十文字に道がついたある、ぐるっと回っとおいなはれ」と言われる始末である。ご本家からは矢の催促で、三日という猶予をもらう。以下は、その三日も過ぎ、明日はいよいよ最終日という段である。妻女はお咲さんという名前になっている。

(11) 咲 「そやけど、あんた毎日どんなこと言うて道を歩いてたんや」 (中略)

熊 「どんな・・・・て、黙って歩いてたんやがな」

咲 「あほかいな、このすかたん」

と切り捨てられる始末である。考えてみるに熊五郎の言うように、探して歩くといいでしょう、黙って歩いていてはどんな手掛かりも得られないのは必定である。お咲さんは、街中では「瀬を早み、岩にせかるる滝川の」という崇徳院の御製上の句を手づるとして大声で呼ばわりながら歩いて、人寄り場所である髪結い床や風呂屋に行って手掛かりを求めるように、という知恵を授ける。熊五郎はそれを実践して、髪結床や風呂屋を巡り、疲労困憊する。

場面四として、熊五郎が先方の棟梁と鉢合わせする局面は、敵討ちのような掛け合いになっている。ト書きには、熊五郎は興奮の余り、棟梁の胸ぐらを掴まえるとある。

(12) 熊 「お、おのれに会おうとて艱難辛苦はいかばかり、ここで会うたが優曇華の、花咲

く春の心地して、親の仇、尋常に勝負、勝負」

棟 「そら何を言うねん、この人、苦しいがな、放さんかいな」

熊 「放してたまるか。そ、その歌書いてもうろうたんは、わしとこの本家の若旦那や（中略）
おのれ連れて去んだら、借家五軒と三百円」

ここで対称詞「おのれ」は、芝居などの文句であるから熊五郎が自発的に用いたものとは言えない。しかし続けて「おのれ連れて去んだら、借家五軒と三百円（が手に入る）」と本音が出ているのは、この延長線上と言えようか。自称詞は「わし」である。熊五郎にしても先方の棟梁にしても、職人階級で言葉は荒いように描かれている。二人が「うちの母屋へ来い、本家来い」と言い争ううちに、床屋の鏡が割れてしまう。床屋が「この割れた鏡はどないしてくれるんじゃ」と問い詰めると、「心配するな、割れても末に、買わんとぞ思う」でサゲになる。崇徳院御製から下の句と懸詞になっている。

ここで、嘶『崇徳院』における人称代名詞の使用を表に纏めておく。

表四 『崇徳院』における人称代名詞の使用例

自称詞

話し手	自称詞
熊五郎	私 わし わたい
親旦那	わし
若旦那	私 わたい

対称詞

話し手	対称詞（相手）
親旦那	あんた、おまはん（熊五郎）お前（熊五郎、お清）
熊五郎	あんた（若旦那） お前（お咲）おのれ（棟梁）
若旦那	あんたはん（娘）おまはん、お前（熊五郎）
お咲	あんた（熊五郎）

熊五郎は人捜しで大坂中を駆け巡るのであるが、嘶全体として人物相関は限られている。親旦那若旦那という身分では、そう荒い言葉遣いにならない。若旦那の自称詞は「私、わたい」で対称詞はせいぜいが熊五郎に対して「お前」と呼ぶ程度である。熊五郎が棟梁に対して「おのれ」と口走っているが、これは「おのれに逢おうとて艱難辛苦はいかばかり」という敵討ちの文句であり、通常の人称代名詞使用とは状況が異なると考えるべきであろう。

全体として、船場の本店と出入りの手っ伝いという請け負い関係を垣間見るような造作になっていたと言えよう。

第五節 『千両蜜柑』

商家ものではあるが、特殊な状況設定になっている『千両蜜柑』を採りあげる（第四巻）。恋思いをする『崇徳院』と同じように、若旦那が思い詰めて寝込んでしまうというのが嘶の始

まりなのであるが、原因は真夏の盛りに蜜柑を食べたいと思い定めた、という現実離れた筋書きである。上方噺にはこのように、何の商いをしているのかは伏せておいて、ただ大店であるという前提で筋が進んでいく場合が多い。これは恐らく、寄席があった地域と船場が重なる故、特定の商売と限定すると差し障りが生じたというような事情があったのであろう。ここでも、親に事情を打ち明けることができず、番頭が聞き役を担うことになる。

(13) 若 「みかんが食べたいのや。紀州みかんのあの柔らかな、色つやのええ、ふっくらとした、あれをこう口に入れて食べたら、どないおいしいやろと思たら・・・・・・・・それを思い詰めて病気になってしても・・・・・・・・こんなあほらしいこと、人にも言われへんやろ。とても叶えられそうもない大それた望み・・・・・・・・」

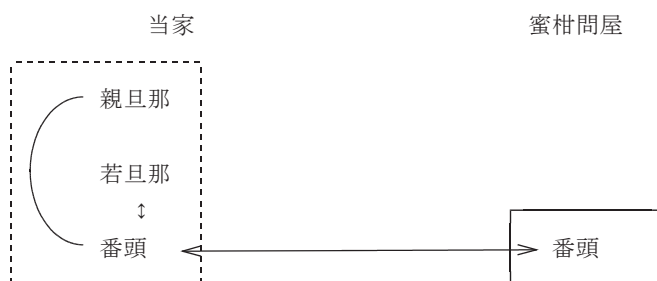
番 「ようそんなあほなこと言いなはる。なんでもっとそれを早うおっしゃらん」

若 「ほな、この望み、叶うか」

番 「お望みならこの部屋、みかん詰めにもして差し上げまひよか」

と安請け合いしてしまう。保存技術やら温室栽培などで年中、どのような農作物でも食べられる現代と違う、江戸時代である。番頭が親旦那に報告したところ、土用の最中に蜜柑がないとて若旦那ががつくりきたら「じかに手を下さいでも、おまはんは倅を殺した下手人や。おおそれながらと、わしゃ訴え出るで。数々罪はあるけども、主殺しに親殺しは一番罪が重い。町中引き回しの上、お前、逆さ磔、」と脅される。自称詞は「わし」、番頭への対称詞は「お前」である。些か強引な論理ながら、子を思う親心が強く滲み出ている。

土用の街なかに放り出された番頭は、探し探して天満の青物問屋に蜜柑を囲う店があると聞き出す。縋るような思いで天満を訪れ、一つの蔵にあった蜜柑三箱を探索したところ、一粒だけ採れたてのような状態で残っていた。対応したのは、蜜柑問屋の番頭であった（米朝師の解説による）。ここまでの人間関係を図示する。



図五 『千両蜜柑』における人間関係

噺の大半は、店で親旦那若旦那と番頭が夏の蜜柑を巡ってあれこれと騒動の元になる。それから番頭が街なかに蜜柑を探しに出かけて、天満で見つけてくるまでは上首尾であった。しかしそれからは、勘定高い噺の運びになっていく。

まずは親旦那が熊五郎に頼んで、若旦那が思い詰めていることを訊き出す段である。若旦那から一通り話を聞いてきた熊五郎は、蜜柑が食べたいのだということを告げる。頃は夏の土

用、暑い盛りである。

(14) 親 「それで、こなたはなんと言ってくれた」

番 「なんともかんとも、おますかいな。今日日、裏長屋の小倅でも、そんなこと言うて患わんちゅうんで、これだけの御大家の若旦那が、なんで早うおっしゃらん（中略）」

親 「……………あんだ、今日を幾日やと思うてなはるのや」

番 「今日は、六月の二十一日」

ここでは親旦那から番頭へは「こなた、あんだ」と二通りの対称詞が使い分けられている。「こなた」は敬度が高いが、「あんだ」はかなり程度が下がる。番頭が迂闊に安請け合いをしたばかりに、それから大坂中を蜜柑を探して大汗を掻くことになる。

番頭は街で蜜柑を探すのに、最初こそ八百屋に飛び込むが、当然の如くに相手にされない。次に狼狽えて鶏肉屋に入ったりもするが、その段は上図に組み入れていない。話中では親旦那と若旦那の間柄でさえ、話題の特殊性に鑑みてか、対話は交わされていないことになっている。全編を通じて主要な登場人物は四人、その間柄も限定される。番頭が蜜柑問屋に飛び込んだのは半ば必然、半ば偶然であったと言えよう。番頭が真夏に蜜柑を買い求めた理由を打ち明けたところ、蜜柑屋の番頭は次のように言う。

(15) 蜜 「よろしい、このみかん持って帰って、若旦那にあげとくれやす。お金は要りまへん」

番 「……それでは気が済みまへん、どうぞお値段おっしゃっておくれやす。いや、高いのは承知でございます。手前どもの主人もまあ、船場ではちょっとは名の知れた大家でございますので、金に糸目は付けんと思います」

蜜 「いや、そらあんだ……………え……………さよか、はい、わかりました。へえ、ほな買うていただきます。買うておもらいたします。そらこちら商いたしたほうが、結構でやすさかいに、はい。ほなこれ一つ、千両いただきます」

番 「千両……………そらあんまり、えげつない。そんな、人の足もとを見るような」

蜜柑屋が意気に感じて無償で提供しようと申し出たのを、番頭は無分別にも言い値で買おうとする。自分が大家の番頭であることを鼻に掛けて、蜜柑一粒が二両であっても三両であっても、掛け値なしに即金で買い取る、というような意気込みが窺える。冷蔵施設もない時代に一夏、蜜柑を蔵ごと囲うという事情は承知しても、たかだか蜜柑一つ、その程度と値を踏んだものであろう。自称詞は商家特有の謙遜語で「手前ども」となっている。「でございます」という敬体は、丁寧度でも最高度であり、番頭が蜜柑一粒を求めるのに必死である心境を反映しているとも言える。ところが豈図らんや、蜜柑屋は一粒千両という値を提示してくる。腐るのを承知で、毎年夏を越して蜜柑を囲う。「皆腐ってしもうたら、今年も暖簾の元入れをしたと思うてあきらめます。しかし一粒でも残ったら（中略）商人冥利、一文も損はようしまへん」という辺り、いかにも商人らしい道理である。以下は、それを受けて意気消沈した番頭が帰ってきた場面である。

(16) 旦那 「番頭どん、顔色がえらい悪いが、みかんはなかったんじゃろな」

番 「ありました」

旦 「あったか」

番 「あることはあったが、話になりまへん。私がちょっと片意地なこと言うたばかりに、みかん一粒千両ちゅうことになりました（後略）」

旦 「何を言うのやいな、おまはん（後略）」

当主は、倅の命に千両は安いものと言い放つ。千両と言えば現代では一億円に相応する大金である。いかに作り話とは言え、法外な値段設定であるが、十両、百両というような中途半端な値では噺としても面白みに欠けるという辺りでこの値になったものであろう。『十両蜜柑』、『百両蜜柑』というのでは落ち着きが悪かろう。そもそものが、季節外れの不自然な噺の造作なのである。番頭の自称詞は「私」、当主から番頭への対称詞が「おまはん」となっている。

千両で蜜柑一粒を買い受けてきた番頭は、急いで若旦那に進呈する。この一粒には十袋あり、若旦那は三袋を残して「一つはお父つあん、一つはお母はん、残った一つを、あんた食べとくれ」と番頭に渡す。突然に迷いを生じた番頭、「来年は暖簾分けやと言われてるけど、出して貰えるお金が三十両か五十両、間違っても百両でな金を出してくれへん」と算段をし始める。蜜柑三袋が三百両、、、という計算で、番頭がこれを持ったまま逐電した、というのがサゲになっている。十袋ある蜜柑一粒を千両で購入したものであるから、三袋は三百両、、、という計算は、売れる見込みのない物に値段を付けている故の悲喜劇である。そもそものが土用の最中に蜜柑が食べたいという無理難題に始まって、一粒千両という値段設定にしても、番頭が蜜柑三袋を持ったまま逐電するというのも、徹頭徹尾現実離れしている。しかし、これはこれで空想世界としての造作を貫徹していると言えるであろう。

ここで、噺『千両蜜柑』における人称代名詞の使用を表に纏めておく。

表五 『千両蜜柑』における人称代名詞の使用例

自称詞

話し手	自称詞
若旦那	私 わて
番頭	私 わし わたい わて
親旦那	わし
蜜柑屋	私 わし 俺

対称詞

話し手	対称詞（相手）
若旦那	あんた（番頭）
番頭	あんさん（親旦那）あんた（若旦那）
親旦那	こなた、あんた、おまはん（番頭）
蜜柑屋	あんさん、あんた（番頭）

蜜柑屋でも、番頭が応対していることになっている。そうすると、番頭同士の駆け引きである。場面も人物も、比較的限定的である。事情を聞いた蜜柑屋が「そういうことなら進呈する」

と言うところを、元の番頭が片意地に代金を払うと言うのに付いた値段が千両であった。蜜柑屋は外向きには「わたし」と称しているが、店の者に対しては「一番ましな箱の一つ持つといで。うん、俺が細こう当たってみるよってに」と命じている。番頭の自称詞は「わたし、わし、わたい、わて」と相手に応じた使い分けている。また親旦那が番頭を呼ぶのも、敬度が高い「こなた」から「あんた、おまはん」と変わってきている。

商いの駆け引きで、「買い手が付いたら商人冥利、一文も損はようしまへん」という辺りが本音であろう。作り事と分かっているながら、駆け引きを楽しむ筋書きである。

第六節 『壺算』と『古手買い』

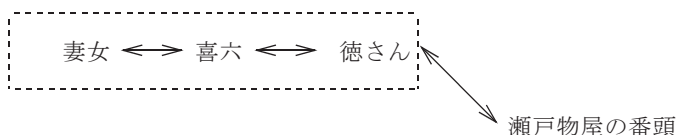
本稿はここまで、船場の商家において繰り広げられる諸々の噺を採り上げてきたが、いずれも本業の商いを扱うような筋立てではなかった。番頭の隠れ遊びや若旦那の恋思い、土用の最後に蜜柑が食べたいと思いつくなど、世間の常識から外れたような「非日常」を描いた噺ばかりであった。しかし考えてみると、寄席という場所は暫しの間、日常から離れて「夢」を見させるような作用をする。歌舞伎や人形浄瑠璃ほど大掛かりではないにしても、近所にあつてふらっと気軽に立ち寄ることができるような場であった。そういうような事情から、これまで採り上げたような荒唐無稽な噺が商家ネタの「主力」とであるとも言えるかも知れない。

本節で見るのは一転して、日々の商いを題材とした『壺算』と『古手買い』である。『壺算』は比較的軽いネタとして、今でも高座にかけられることは多い。しかし『古手買い』はいかにも古風で、難しい割りに掘りが少ないので、長い間演じ手がなかった。それを米朝師が再演して、今見られるような形に整えていかれたという経緯を辿っている。なるほど、粗筋を通読してみても上述のような経緯は「然もありなん」という思いがする。昨今はまた、多様な形態の古着屋が全国展開され、文字通り隔世の感がある。

『壺算』

発端は長屋の二人連れである。買い物上手と称される男は「徳さん」と呼ばれているが、壺を買うように妻女から言われた男は、名前を呼ばれないので分からない。高座ではそれで不都合はないのであるが、以下では名前が知れずとなると不都合であるので、仮に「喜六」としておく。喜六は、徳さんの近所に宿替えをしてきたのであるが、その早々に水壺が割れてしまう。その段は、喜六と妻女の会話になっている。「嬢、えらいことした、壺が割れたがな」「宿替え早々、壺が割れたてな、そんな験の悪いこと言うもんやおまへん。こら割れたんと違います、数が増えたんですがな」。夫婦の間でも、敬体で他人行儀とも言えるような話し振りである。割れたのは一荷入り^{*1}の小さい壺であったのを、これを機に大きな二荷入りに買い換えようというので、喜六が出かけようとする。妻女は「あかんあかん、あんたぐらい買い物下手な人はない。あんたは安いもんを高い銭出して、まだおおきにありがとさんと礼言うて帰ってくるような人や。そこへ来ると、徳さんちゅう人は買物がうまい。あら大体人間が悪賢うできてるさかい、買物はなかなかうまい。あいつうまいことおだててついて行てもらえ」との趣旨であった。全体は妻女の言を喜六が忠実に再現しているのであるが、最後の「ついて行てもらえ」は中間話法として乱暴になっている。恐らくは「ついて行てもらいなはれ」というぐらいに敬度表現をしたはずである。喜六への対称詞は「あんた」で、徳さんの他称詞は「あいつ」と卑罵

表現である。これも、普通に言えば「あの人」という辺りが中立で妥当であろうが、故意に卑罵語的にしようという意図も窺える。ここで、この人間関係を図示しておく。



図六 『壺算』の人物図

このように、『壺算』においては常に二者での会話で筋が進行しているという様子を写している。瀬戸物屋だけは客に対して相対的に下位に位置付けている。

壺を買いに行くようになった経緯の説明で、喜六は徳さんに妻女との応酬を再現している。「なんちゅうこと言いなはんねん、宿替え早々壺が割れたてな、そんな駄の悪いこと言うもんやおまへん、こら割れたんと違います。数が増えたんですがな」という対話は独立したものではない。そうするとこの噺は、喜六と徳さんと瀬戸物屋という実質三人の登場人物によって進行していると言える。喜六が付き添いを頼む場面では、徳さんが「そんなあほなこと言うのやないで、お前、ええ。そいでどないしたんや」と話を振る。そこでもまた、喜六が妻女との会話を再現する。

(17) 六 「よっしゃ、ほな、わしが買うてくるわ」

妻 「あかんあかん、あんたぐらい買物の下手な人はない。あんたは安いもんを高い銭出して、まだおおきにありがとさんと礼言うて帰ってくるような人や。そこへくると、徳さんちゅう人は買物がうまい。あら大体人間が悪賢うでけてるさかい、買物はなかなかうまい。あいつうまいことおだててついて行てもらい」

と洗いざらい、夫婦間での内緒話を当の本人を目前にして暴露してしまう。徳さんの他称詞を「あいつ」としているところまで、無配慮である。徳さんは「今、お前そこで何を言うたんや、それ」と咎めるが、喜六との付き合いで買物に付き合うことになる。徳さんと瀬戸物屋の番頭が中心になって、水壺の値段を巡って笑いを誘う。

二人が瀬戸物町までの道中に買物の極意について何やかやと談義している段も滑稽であるが、先を急いで壺を買いに一軒の瀬戸物屋に入る場面をみる。応対した番頭は、「いや、なんぼかんぼと言われましてもな、この通り軒並みがずーっと同商売でございます。朝商いのことやし、あんさん方のこっておますさかいな、そら決して高いことは申しまへん。もうお値段のほうもうんとお安う、せいぜい勉強いたしまして、どーんと働きましたところが、三円五十銭が一文もまかりまへんので」とまくし立てる。徳さんは逆手を取って「ほたら、これ、軒並みずーっと同商売やのうてやな、朝商いやのうて、あんさん方のことやのうて、まけんと勉強せんと働かなんたら、なんぼになるねん」と返す。この辺りは、買い物上手と言われるだけある。商人の常套文句を逆手にとって返すのが高等戦術である。番頭はしどろもどろになって、「……ええ……三円五十銭」と返答するのがやっとなのである。とどのつまり、番頭はどれだけ値引きができるかを想定せずに常套文句を繰り返していた、という実態が暴露されたようなものである。

これで機先を制した徳さんは、一荷入りの壺を三円とまで値切る。以下は、その場面である。

(18) 徳 「そやさかい今日のところは、わいの顔立てて、うんちゅうて。ちょうど三円、な、頼む。うんと言ひ、なっ」

瀬 「もの言われへんがな、もう・・・・・・うまいなあ、あんたみたいな人・・・・・・そ
ない言われたらもうなんとも言われしまへんがな」

徳 「ほな三円にしといてくれるか」

瀬 「さ、もう少々なんとか」

と瀬戸物屋も粘るが、徳さんの方が一枚上手であった。しかし、これはまだまだ序の口であった。買い物頼まれた水壺は二荷入りで、値段も倍になるというのを織り込み済みで一荷入りを値切っていたのである。

徳さんは、当初から計略があった。二荷入りの壺は一荷入りの倍ということを一先承知で、まずは一荷入りの壺で先鞭を付けて、二荷入りと取り替える際にもう一段工夫を凝らそうという魂胆だったのである。喜六と二人で一荷入りの壺を担いで帰るような風を装い、町内を一周した辺りで瀬戸物屋に戻ってくる。徳さんが二荷入りの値を尋ねると、「へい、ちょうど一荷入りの倍でございますな、(中略)……ほな、倍の六円。……あんた買物うまいわ。ほなあんた、一円もまけんらんことになる」と青ざめる。ここでの対称詞は「あんた」である。一見の客ではあったが、二度目の応対で親密さが増したものと考えられる。

徳さんの計略は、当初の一荷入りを返品してこれを三円に充当し、渡した現金三円と合計して六円で勘定が済ませる、と番頭に言いくるめるというものであった。喜六でさえ理解できる、このような初歩的な勘定に番頭が苦しむというのは、噺の運びとして不自然さは否めない。返品した時点で、現銀三円に戻せば、それで片付く勘定である。壺を担げて店を出た喜六が頻りにげらげら笑うので、徳さんは「それ見てみい、おのれがげらげら笑うさかい、向こもなんやわからんけど、おかしいなと思ひよんねやがな」と論ず。ここは、番頭が訝しく思うところをさっさと切り抜けて店を立ち去らねばならぬのを、喜六が殊更笑い立てて徳さんの計略を台無しにしてしまいかねないという場面である。番頭は何度も何度も繰り返し、二人を店に呼び戻しては「勘定が合はん」と引き留める。番頭がついに「何がなんやらわからんようになってしもた。もうあんたこれ、持って帰っとくなはれ」と音を上げた。サゲは徳さんが「それがこっちの思う壺や」という勝利宣言である。

徳さんの計略は、いきなり目的の二荷入り壺を買うという分かりやすい手順を選ばずに、一荷入りで交渉をするという高等戦術であった。値引率は、一荷入りと二荷入りとで同じなのであるが、二荷入りでは定価が七円のところが一円も値引きすることになる。それだけでも瀬戸物屋にとっては大きいのであるが、一荷入りを返品するのでそれを三円分に充てるといふ、詐欺まがいの手まで繰り出す。一荷入りを返品した時点で現銀の三円も返して、改めて六円を請求すればよいのであろうが、それでは面白くもなんともない。一家の番頭たるものが、こういう単純な手口に引っ掛かって最後は音を上げるという、実際にあっては困るようなネタであるが、人気を博しているのは番頭の困る様子が聴き手に受けるからであろうか。

ここで、噺『壺算』における人称代名詞の使用を表に纏めておく。

表六 『壺算』における人称代名詞の使用例

自称詞

話し手	自称詞
徳さん	わし
喜六	わし わい
瀬戸物屋	わて おら（俺）

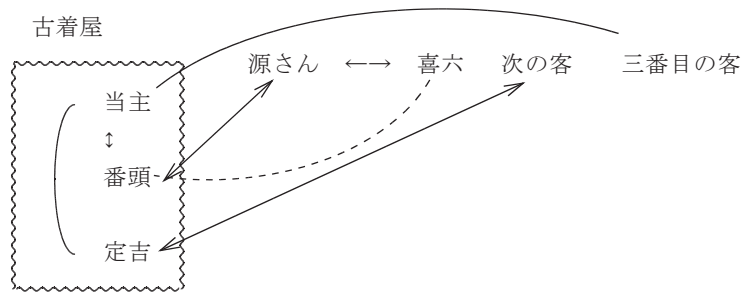
対称詞

話し手	対称詞（相手）
喜六	あんた、 お前（徳さん）
徳さん	おまはん、お前、おのれ（喜六）
喜六の妻女	あんた（喜六）
瀬戸物屋	あんさん方（喜六と徳さん） あんた（徳さん、他の客）

場面も人物も限られているので、人称代名詞も限定的である。自称詞は徳さん、喜六、瀬戸物屋の番頭三人分として「わて、わし、わい、おら（俺）」という変種が示されている。対称詞はその三人に喜六の妻女を加えて「あんさん方、あんた、おまはん、お前、おのれ」となっている。対称詞も、喜六が妻女の語りを再現する他は三人の間で交わされた分である。二人が瀬戸物屋を何遍も出入りするので、徳さんが喜六に「それ見てみい、おのれがげらげら笑うさかい、向こもなんやわからんけど、おかしいなと思ひよんねやがな」と詰る場面での「おのれ」は、野卑度が高い。ゲラゲラ笑うことによって瀬戸物屋の番頭に怪しまれることを非難するという気持ちが込められているのであろう。これ以外に、規範を外れたような人称代名詞使用はないと言える。

『古手買い』

布屋という古着屋で繰り広げられた騒動の『口入れ屋』と同様に、この噺も古着屋での商いを題材にしている。『口入れ屋』は、目見えに來た女子衆を巡っての騒動が題材であったので、本業の古着商いは詳細に描かれていなかった。奉公人の余得として、店の売り物を原価で下げ渡す、分割払いで、最後は番頭の計らいによって完済せずに帳面はどがちゃがどがちゃが、というように実に鷹揚な商い振りであった。それに比べて『古手買い』は、店先での商いが綿密に描写される（第六巻）。また、冒頭場面は店先ではなく、買い物上手である源さんに古着屋への同行を頼むという点は『壺算』と共通している。次に來た客には、高価な刺し子の火事羽織を持ち逃げされてしまう。三番目の客でサゲになる。次々に訪れる客に対応するのが、番頭一定吉－当主と入れ替わっている点に注意が必要である。この人間関係を示しておこう。



図七 『古手買い』の人間関係

源さんに同行を頼んだ男は例によって名前が知れないので、ここでも「喜六」としておく。噺全体の特徴としては、このように三組の客が訪れるのであるが、それぞれ対応したのが番頭、定吉、当主という順になっている。客が多いので、水平に延びた人間関係になっているのが見て取れる。古着屋に行く前に、喜六が源さんに事情を説明する場面から本筋に入る。

喜六の説明は要領が悪い。義理の弟に木綿ものを宛がうようになる事情を長々と説明した後、「ほな、坐摩の前へ行って、ひとつわいがなんか買うてきたるわい」と言う。坐摩神社は通称を「ごまさん」と呼ばれ、門前に古着屋が軒を連ねていた。それで古着屋のことを「坐摩の前」とも呼び習わしていたものであろう。喜六は自称詞が「わい」、「きたるわい」で終助詞「わい」と、やや荒っぽい言葉遣いである。妻女は即座に「ああ、そらあかん」と提案を却下する。「あんたほど買物の下手な人はない。あんたはな、しょうもないもん^{いかすり}に高い銭出して、まだ、おおきにありがとうと礼を言うて帰ってくるような人や。ましてあんた、古手屋でなところは駆け引きの要るところ。(中略) あんたみたいな人を古手屋なんかに、そらとても行かされへん。そこへいくと、あの源さんちゅう人は、あら買物がうまい。なかなか人間が悪賢うできてるさかい、あの人は買物がうまい (後略)」と長広舌である。喜六の説明が要領が悪いというのは、余分な事情まで含めて、一から十までべらべらと喋ってしまうこと、その余分な事情には「人間が悪賢うできてる」というような、本人には秘匿すべき内容まで含まれる、というような具合である。『壺算』では「あいつ」という卑尊度が下がる他称詞であったが、ここでは「あの人」と穏当になっている。

古着屋に入ると、番頭が「お越しやす。どうぞまあ、お座布団^{ざふだん}を……」と応対する。頼りない喜六に代わって、源さんが「身丈は七寸五分」というように仕切っている。傍らで喜六は座布団の綴じ糸をむしったり、猫のひげを抜いたりして番頭に注意される。値段交渉をするのに、番頭は算盤を入れるという。口頭で交渉するより、算盤を介する方がお互いに好ましいと考えたものであろう。喜六は算盤の入れ方さえ知らないものと見えて、全桁の珠を動かしたところが「一六八万三九二三円五四銭二厘五毛」という途轍もない額になっていた。番頭は呆れて、口頭で「五円十五銭と珠入れさしてもらいました」と告げる。半端を値引きして、五円という値を提示したので、源さんは「どやこれ、五円ちゅうてはんねやがな」と喜六に尋ねる。喜六は喜んで、「ちょっと、ちょっと、わ、わいに値切らして」と応ずる。ところが、その値切り方というのが「これ、十銭にまからんか」と言うのである。聞いた方は当然、「十銭値引きして四円九十銭か」というように考えるのが自然であろう。喜六は「台も、床几も、踏まえ継ぎも、踏み台も、なんにもない、十銭や」と畳みかける。「台」とは、何円何十銭の円の所

を指す。それが、「台も何もない、ただの十銭」というのであるから、番頭は怒り出す。「うちはなあ、うちの品物^{しなもん}にはみな元手がかかってまんねん。盗んできた品物や捨てきた品物売ってんのと違いまんねや」と啖呵を切る。

喜六は、「それ、あかなんだら、もう十銭つける」と、二十銭まで払うと言う。これが番頭の怒りに油を注いだ。「去になはれ、あんた。何を言うてんねや、ほんま人を馬鹿にして、ええ。あのなあ、あんたみたいな人な、風の強い日イは表あるきなはんや。ひゅーっと飛ばされて、紙屑と一緒にどっか行てまうで、あんた（後略）」と、えらい剣幕である。ここに源さんが引っ掛かる。自分が後見人として同行したのに、如何ほど喜六が無茶な値切り方をしたとは言え、自分の立場がないという言い分なのである。

(19) 源 「わしはどないなんねや」

番 「いや・・・・・・・・」

源 「ここへ座って、木綿の裕見せてくれちゅうたん、わしやで（中略）まあ、あいつはあほやとせえ、あんな奴は、な。それがお前、たとえ五円のを十銭につけたかてやで、初めに言うたあるやないか、俺がついて来てんねやさかい、『もうし、こっちゃんのお客さん、あのお方があんな無茶なことをおっしゃる。あんたが中へ入ってひとつ裁量しとくなはれ』と言うてこそ商売人と違うかい、おい（中略）おい、人のもん盗むばかりが盗人やないぞ。その道においてその道を務めざる者を家職盗人、禄盗人^{めすびと}ちゅうねや（後略）」

六 「ちょ、ちょっと、わいにも言わして、わいにも言わして」

源 「言うたらええねや、お前かて」

六 「こ、こ、こらっ・・・・・・・・ば、馬鹿にすな、ほんまに。ど、ど、どない思てけつかんねん、お前。な・・・・・・・・初めに口を利いたんはわしや」

源 「そら、わしやがな」

(中略)

六 「いや、そや、まあええがな。まあ、な、とにかく、たとえお前、十銭のもんに五円の値エつけたかて・・・・・・・・」

源 「そら、あっちゃこっちゃや」

源さんの長台詞が続くが、前半は番頭への叱責、後半は喜六が「わいにも言わして」と懇願するところから、喜六との掛け合いになる。番頭には「家職盗人」呼ばわりで、完膚なきまでに言い負かしているのであるが、当の番頭には堪えていない（後段で明らかになる）。随所で喜六を引き合いに出しているが、喜六はなんとも感じていないようである。ここで採録したのはこの段、会話の一部分だけであるが、これだけでも喜六の話し振りが見えてくる。要領が悪いだけでなく、事実の取り違えを連発している。曰く、店で口火を切ったのは自分である、曰く、十銭の物に五円の値を付けると言い違える、等々。口達者な源さんと好対照にしてある。自称詞は、源さんの真似をするために「わい」から「わし」と言い換えたりする工夫も凝らしている。人物造形として、源さんは口達者で何事にも即座に滔々とまくし立てるのに対して、番頭は分が悪い。喜六に至っては、口下手で問題外である。とどのつまり、源さんと喜六は何も買わずに店を出てしまう。

この対応を耳にしていた古着屋の当主、「えらい店が騒がしかったやないか」と店先に出て

くる。番頭は「はあ、無茶な奴が来りましたんでね、ちょっと一本かましたりしましたんや」と応じるも、当主は「ほうほう、一本かましたけど、三本ほどかまされてたやないか」と手厳しい。これは当主に理があって、「なるほど口豪輩な無茶なお二人やったがなあ、あの人の言うてことは間違うてはおらんで。『その道においてその道を務めざる者を家職盗人』、よう言いなはったなあ」と追い打ちを掛ける。ここで当主は番頭に教訓を垂れる意図として、直近にあった例を話して聞かせる。船場辺りで大店を張っていると思われる商家の当主が、奉公人のお仕着せを買いに来たらしい。元は当主の一人語りであるが、これを二人の会話として仕立て直してみる。

(20) 客 「木綿の袷を見せてほしい」

店 「仕立てがこうで、裏がこうで、脇がこう、どこにも傷みはございません。これはもう、少々手荒う着ていただきましても大丈夫でございます、新品同様の品」

客 「あー、結構です。おいくら」

店 「八円五十銭でございます」

当主同士の会話で、値段の交渉も何もない。店の言い値をそのまま受け容れて袷を購入するのである。そうしておいて喜六と源さんの一件に話を戻し、『『こんな店、二度と来るかい』とおっしゃったな。あの二人だけが来んのやないで。ああいう人じゃ、近所隣から友達へ『おい、坐摩の前行ても、あの店だけは行くな』、何十軒のお客しくじったかわからんのやで』と、商いの道を諄々と諭すのである。当主からしてみれば、番頭が行き届かぬところを客から教え諭された、という捉え方もできる。

二人の応酬を傍らで耳にしていた定吉は、「番頭、怒られてけつかる。ええざまや、へっ。偉そうに偉そうに、いつも言いやがって」と、日頃の恨みを晴らそうとする。「番頭」と呼び捨てで、「怒られてけつかる、言いやがって」という卑罵語補助動詞が定吉の心情をよく表している。定吉が店番をしているところへ、次の客が入って来て「刺し子を見してもらいたいがな」と持ち掛ける。刺し子の火事羽織というのは高価な物であり、実際に火事場で着ることもあったのであろうが、半分は伊達で実用的ではなかったと思われる。この客が試しに羽織ってみたところで、表で半鐘が鳴り出した。客はこういう機会を狙い澄ましていたものと見えて、これ幸いと羽織を着たまま店を出てしまう。当主が「四十円も五十円もする」という品を持ち逃げされたのである。当主が嘆いているところに、三番目の客が入来して対応する。今度は麻の袴を、という客であった。当主は定吉に品を出すよう命ずるが、定吉は繰り返して「あきまへんねん」と品物を出すことを拒絶する。まるで立場が逆転したかのである。サゲは定吉が「向かいの辻から葬礼が出かかとりまんねん」と言う。火事羽織の次に袴を持ち逃げされるので品物を渡してはならぬ、というのである。

米朝師の解説によると、サゲまで口演せずに前半で切る演者が多かったという。前半ということは、源さんと喜六が啖呵を切って店を出て行くまでである。なるほど、喜六の値切り方が如何に常識外れであっても、番頭の言い分は商人としての道を外れていると言えよう。源さんが小気味の良い啖呵を切ったところでスパッと高座を下りるのも一法であろう。しかし古い型で火事羽織と麻袴の客まで繋ぐのも、それなりの味わいがあるであろう。火事羽織を持ち逃げしようとするところで半鐘が鳴り出すというご都合主義の要素もある。

ここで、この噺における自称詞と対称詞の使用を表に纏めておく。

表七 『古手買い』における人称代名詞の使用例

自称詞

話し手	自称詞	
当主	わし	
定吉	私	わし わい
源さん	わし	
喜六	わい	

対称詞

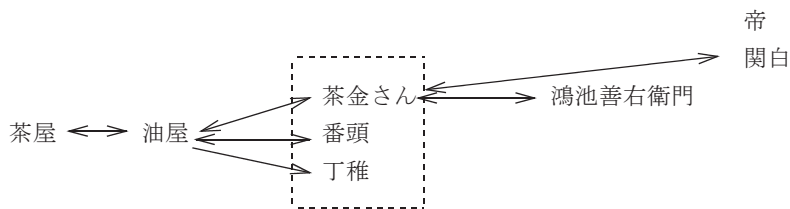
話し手	対称詞（相手）
当主	こなた、こんた、おまはん（番頭） 貴様（丁稚）
定吉	あんた、おまはん（手代）
喜六	あんた（番頭）

買い物上手に頼んで、値引き交渉に付いていってもらおうという筋立ては『壺算』と同様である。この噺では喜六が源さんに頼むというようになっている。ところが古手屋に入った後は、喜六と源さんの後に二人、客が続く。しかしこの客が曲者で、一人は高架な火事羽織を持ち逃げした。その前後を巡って、当主－番頭－丁稚という三者間で織りなす相剋が聞かせ所になる。喜六と源さんは買物が不首尾に終わって古着屋を出ると、主役交代なのである。こういう場面転換は、比較的珍しい。この噺が古風で高座に掛けられる回数が減っていったのは、そういう事情があるのかもしれない。

第七節 『はてなの茶碗』

上方噺で大店の商いと言えば、必然的に船場の店が多くなるであろう。「大坂は天下の台所、京は王城の地」と並び称すように、京は大坂から独特の視点で描かれている。京の商いは、船場の本店とは何から何まで違うような造りになっているようである。心齋橋に匹敵するような繁華な通りは京極や寺町であり、それは今でも同様であろう。しかし京の店は主に観光客相手に、船場のような卸問屋は少ないのではなかろうか。本節で扱う『はてなの茶碗』にしても、京での商いも絡む『京の茶漬け』にしても、お茶屋噺である『愛宕山』にしても、大坂人の色眼鏡越しに京の人を見ているように思われる。どうも「気位ばかり高くて扱いにくい」というような本音が見えているようである。他方で、道具屋や骨董屋というような特殊な業種は、京ならではの立地の利点を有しているようでもある。

まずは、『はてなの茶碗』での人間関係を図示しておこう（第六巻）。



図八 『はてな茶碗』における人間関係人間関係

この斬で特異であるのは、関白鷹司公が狂歌を一首認めるだけではなく、帝が一言お発しになり、茶碗に「波天奈」と箱書きまでなさるという点である。江戸ネタを含めれば千を超える斬の中でも、帝を扱うものは他に類例を見ない。畏れ多いようであるが、これは茶碗に箔を付けるために不可欠なのである。茶道具屋の金兵衛さん、人呼んで茶金さんは「京一の道具屋、ということは日本一の道具屋」ということになっている。

今も昔も京で一、二を争う名勝の清水さん、滝の下にある茶店で、お茶を飲んでた担ぎの油屋が、茶店の主に話しかける。

(21) 油 「ところで親父っさん、一つ頼みがあるのやがな。^{よそ}余所で水を汲んでもらうのに、この通り手が油だらけやろ。自前の茶碗があったら、それで遠慮のう汲んでもらえる。ここにある茶碗、一つ分けてもらわれへんやろか」

親 「ああ、そんな頼みかいな。そこにある茶碗、どれでも持って行きなされ、金は要らん」

油 「ほなら、これもらうわ」

親 「ああ、それだけはあかん。おまはん、大坂の人じゃから知らんやろが、最前そこに座ってお茶を飲んでなされたのは衣^{ころも}棚にある茶道具屋の金兵衛さん、人呼んで茶金さんじゃ。京一の道具屋、ということは日本一の道具屋や。あの人が「この品は」と指を指しただけで五両、十両という値が付く。その茶金さんが最前その茶碗を手にとって、せんどひねくり回したり日に透かししたりして「はてな」ちゅうて置いていった。ひょっとしたら、五百両、千両という値打ちもんかもしれん。それだけは置いといて。他のんやったら構へん、持って行き」

油 「なんや、知ってたんかいな。わしも茶金さんがひねくり回してるさかい、うまいこと言うて持って行ったらと」

親 「悪いやっちゃん」

油 「ばれたらしゃあない、ここに二両ある、これで身上^{しんしょう}のありったけや。もっとあったらもっと出すけど、三年間油売って貯めた金や。これでこの茶碗、売って」

親 「これは二両や三両の金では売れんわい、ひょっとしたら五百両、千両になるやもわからん」

油 「そうかい、ええわい。売ってくれなんたら、今ここで割ってしもたる」

親 「手荒な人じゃな、…」

これが後々、思いも掛けない展開を遂げる物語の発端であった。担ぎの油屋は大坂で親に勘当され、その日暮らしのような商いに身を窶しているのがあった。茶店の主は、茶金さんが湯飲み茶碗に興味を持ったらしいことを見て取ったので、「これは値打ちもんやもしれぬ」と考えていたのであるが、泣く泣く二両で茶碗を油屋に売るより仕方がなかった。それほど油屋が

強引だったのである。

数日して、衣棚の茶道具屋に現れたのが、身なりを整えた油屋である。茶金さんに見てもらいたい物がある、と言うのであるが、番頭が「店の決めで、まず番頭の私が目を通します」と襖紗ふくさの風呂敷ほどを解いて、仰々しい箱の中から取りだしてみると、なんの変哲も無い清水焼の茶碗である。「せっかくどすけど、手前どもでは目が届きかねます」と、押し問答になったところに茶金さんが、店の奥から「店が騒がしい、どないしたんや」と現れる。油屋が経緯を述べると、次のような話になっていく。

(22) 茶 「どっかで見たお方やと思たら、あの時の油屋さんでしたか。いや、この茶碗、お茶を飲んでるとぼたぼたと漏れますのじゃ。傷でもあんのかいなあと思って調べてみたが、傷もなければ釉薬うわぐすりに何の障りも無い茶碗からポタポタとお茶が漏る。おかしいなあ……、はてな、と」油 「ほたらなにかいな、これただの傷茶碗かいな」(中略：油屋は親に勘当されて大坂から出てきたこと、三年間油を売って貯めた金二両を放り出してこの茶碗を奪うようにして買うてきた事など、一通りを語る)

金 「いわば、茶金という名前を買っていただきましたようなもん、商人冥利あきんどみょうりに尽きます。あんさんに損をさせてはすまん、この茶碗わたしが買わしてもらいます」

油 「え、千両で」

金 「千両ではよう買わん。元値の二両、それへ一両足して三両。この一両はここまでの足代、箱代、風呂敷代としてお収めやす。この道はなあ、せんど苦勞して、損をした者が掘り出し物をしようとしてはまたしても損をする。なかなかお素人衆の手に合う道やおへん。親御さんも決してあんさんが憎うて勘当やまけしはったわけやない。三年のあいだ額に汗して働いた、これが何より親御への土産。しょうもない山氣起こさんと、この三両持ってどうぞ大阪へお帰りやす」

ここはまだ茶碗を巡る流転譚の序段である。元はと言えば、油屋が山氣を起こして茶碗を二両で買い取ったところから筋が廻り始めたのである。油屋は照れくさかったのであるが、三両を受け取って逃げるようにして店を退散した。茶金さんは自称詞が「わたし」で、油屋への態度も「あんさん」と丁寧である。「商人冥利に尽きます、この茶碗買わしてもらいます」と敬体で遇し、最後は「この三両持ってお帰りやす」と親切に諭している。

茶金さんほどの大店では、高貴のお方ともお付き合いがある。関白鷹司たかつかさ公のお屋敷に参上した折に「金兵衛、近頃世上に面白き話はないか」とご下問あった。「先ごろ手前どもでかようなことがございました」と仰せになった。「それは面白い、麻呂も一度その茶碗が見たい」と、自称詞が「麻呂」となっている。

茶金さん、人を走らして茶碗を参上する。お湯を注ぐと、やはりポタリポタリ。調べて見ても傷もなければ釉薬に何の障りもない。「面白き茶碗である。料紙を持って」筆を取り上げにりますとサラサラと一首の歌。

清水の音羽の滝の音してや 茶碗もひびに 森の下露

これが御所中の評判になった。とうとう時の帝にまで聞こえて、「朕も、その茶碗が見たい、…」との仰せ。志ん生師匠の口演録音には「朕」と聞こえる。茶金さん精進潔斎しょうじんけつさいいたしまして茶碗を持参したが、どんな人の前でも茶碗は同じこと、やはりポタリポタリ。御衣おんぞの裾を濡らした。帝は筆をお取り上げになって、箱の蓋に万葉仮名で「波天奈」と箱書きが座る。えらい値打もん

になって茶金さんのところへ戻されてきた。

日本一の金持ち鴻池善右衛門が「茶金さん、その茶碗ぜひともわしに売ってもらいたい」と所望したが、

(23) 茶 「尊いお方のお筆の染まりました物、お売りするというわけにまいりません」

鴻 「さよか、ほなこないしましょ。うちへ千両で預けとくなはれ。千両で質に置いてもらう、で、早いこと流しなはれ」

えらい手間を掛けしたが、千両で売れたようなもの。茶金さんは「油屋が通りかかったら、知らしてやらな」と思うが、油屋も照れくさいのか、茶金さんの近所を避けて通るようにしていた。十日ほどして、やっと丁稚が油屋を見かけた。嫌がるのを無理矢理にお店に連れて帰ってきて、茶金さんが千両に売れた事情を話す。

(24) 油 「京の人間っちゅうのはえげつないと聞いてたけど、口銭取り過ぎやないか。人には傷もんや言うて三両に値切っといて」

金 「いやいや、そうやない」(中略)

油 「茶金さん、あんさん偉いお方だんなあ。わたいらが持ってたただの傷もん、あんさんの手にかかったら値打ちもんや。これもあんさんの人徳^{にんとく}だっせ。三両持って帰ったものの、恥ずかしい思いしたと胸がもやもやしてましたけど、今の話聞いて、気持ちがすっとしました」

金 「ついては、千両の半分、五百両をあんたに差し上げましょう。残りの五百両、近頃京にも困ってる人が多い、施しをしたい」

油 「五百両で、あの茶碗とわたしは、三両で縁が切れてまんねん、、、」

ここでも、油屋が揺れる心の裡を持って余すような描写である。なんやかんやと言いながら、油屋はやはり五百両を受け取って帰って行った。それはそうであろう、濡れ手に粟の大金である。茶金さんも「やれやれ、これで油屋さんも大手を振って大坂に帰ったやろ」と思い、四、五日も経った頃。表で、揃いの浴衣で大勢が何やら重たい物を担げて「それぞれ、運び込め」と大声で囃し立てているのをひょっと見ると、先頭で音頭を取っているのが油屋である。

(25) 金 「これ、こんな物持ってきて、何をしとるのやな」

油 「ああ茶金さん、十万八千両の銭儲けや。水瓶の漏るやつ、持ってきた」

とサゲになる。千両の百八倍で、十万八千両。百八は除夜の鐘で撞く、煩悩の数で、小さな清水焼の茶碗が千両なら、大きな水瓶なら百倍ほど、そんな勘定なのだろうか。

そもそものが作り話の極致で、トントン拍子に茶碗が値打ち物になって行く辺りに聴き手は心を躍らせたであろう。現実にはあり得ない物語である故に、話術で聞き込ませるところが快い。茶金さんとて、始めからあの茶碗が千両で売れるとは露とも考えてはいなかったであろう。成り行きで、最後は千両という値が付いただけのことであるが、油屋は「京の人はえげつない」と評している。茶金さんが油屋を「京の人間では、こうはいかん」と評したことの裏返しである。

ここで、この断における自称詞と対称詞の使用を表に纏めておく。「清水」というのは、清

水寺境内にあった茶屋の主を指す。

表八 『はてな茶碗』における人称代名詞の使用例

自称詞

話し手	自称詞
油屋	私 わし 俺
清水	わし
茶道具屋番頭	手前ども 私
茶金さん	手前ども 私 わし
関白	麿
鴻池さん	私

対称詞

話し手	対称詞（相手）
油屋	あんさん、あんた、おまはん（茶道具屋番頭、清水）おのれ（茶金さん）
清水	おまはん（油屋）
茶道具屋番頭	あんた（油屋）
茶金さん	あんさん、あんた（油屋）
鴻池さん	おまはん（茶金さん）

上方噺、ざっと数えただけでも五百から六百にもなるが、帝のお言葉というのは他に例を見ない。三遊亭志ん生師の口演録音では「朕もその茶碗が見たい」と仰せになったのが残っているが、これはご愛嬌であろう。「朕」というのは詔勅などに記される書き言葉であり、濫りに口にするような話し言葉ではないからである。しかし米朝師の口演筆記でも関白鷹司公が「朕もその茶碗が見たい」と仰せになったと文字化されている。

茶金さんの店では、当主も番頭も「手前ども」と敬度の高い謙譲語である。これに比べると「私」は一段、下に置くべきであろう。油屋の用いる対称詞は、状況に応じて千変万化の様相を呈している。茶金さんや番頭への対称詞は「あんさん」と丁寧に心懸けているが、例の茶碗が千両に売れたと聞いた折には、「そういう奴や、おのれは」と口走っている。子細を聞かずに、いきなり結末だけを知らされたからであった。しかし途中の経緯を聞かされると、「あんたえらい人やなあ」と言葉遣いが変わるのである。

米朝師の解説によると、この原話は十返舎一九作の『世中貧福論』に見られるという。そして米朝師は、「十万八千両の大儲け」というサゲを「屈指の名作」と高く評価されている。

第八節 結び

以上のように本稿では、上方噺のうちで商家ものを採り上げて人間関係を主軸に据えて分析してきた。商家は当主－番頭－手代－丁稚という階層構造になっており、それぞれの役柄も明確に区別されている。当然、言葉遣いにもそのような階層構造が反映される。下位から上位に向かつては尊敬語で遇することが多く、逆は卑罵的表現でも許されるであろう。また、客に対

しては丁寧な言葉遣いが必須であるが、客からは尊敬語と卑罵語の間である中立的な待遇表現で事足りるであろう。

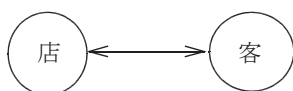
店の中では対人相関は垂直の階層構造となっているが、ここに客が絡むと、構図が変わる。即ち、例え店主であっても立場的には客の方が上位である。『古手買い』では、当主が直接に客の対応をする場面があった。また本稿では採り上げなかったが、『肝つぶし』という噺で、由松という男が呉服屋の店先で応待を待っているが、番頭が他の客に掛かりきりで待たされるという場面がある。(第二巻)。これは夢なのであるが、その娘が様子を見かねて店先に出てくる。前半は番頭の藤兵衛に対して、後半は由松に話しかけている。

(26) 娘「藤兵衛、あんたなんちゅうこと言いなはんねん。晒一尺買うていただいたかてお客さんやないか。晒七尺ぐらいじゃまくさいとはなんやのん。あんたそんなこって、ようお店預ってなはるなあ。(中略)ただいまは誠に失礼なこと申しました。お気に入るか入らんか存じませんが、これ、お気に入ったほう一つ選んどくれやして、常着にでも着てもらいますように」

由「そんなあんた晒七尺買うて、反物一反もろて帰るてな、そんなことでけますかいな」

夢で見た内容であるから、晒七尺の買い物に反物一反を添えるというような現実離れた設定になっている。商家の身内として番頭に話しかける際と、たとえ晒七尺しか買わないとしてもお客である由松に應對するのでは、必然的に言葉遣いも異なる。番頭に対しては「あんた」「なんやのん」と常態、由松には「誠に失礼なこと申しました、お気に入ったほう一つ選んどくれやして」と丁寧な應對である。但し、番頭の藤兵衛に対しても「言いなはん、お店預かってなはる」と尊敬語助動詞「なはる」を用いている。この辺りは、お客の由松を意識しては居るが、直接に言葉に向けている番頭への配慮であると言える。

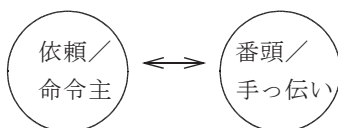
商家ものでネタ数としては、客が店先に来て商品を売り買いする噺はごく少ない。どうやら、毎日顔を合わせて奉公している、気心の知れた身内同士で筋を運んでいく方が会話が弾むようである。初対面の客相手では、話題を選ぶにも神経を遣うであろう。ここで、店と客の人物相関を単純化して図示してみよう。立場上は客の方が上位に位置するべきなのであるが、単純化するために水平に並べた。『壺算』や『古手買い』のように付き添いを頼んだ場合にも「客」として一括りにしてある。通常は客は品物を買ってくるのであるが、『はてなの茶碗』では油屋が客として茶碗を売りに来る。



図九 店と客の人物相関

個々の噺においては、対人関係に基づいて特殊な頼み事をするという筋立てが噺を面白くするものがある。『千両蜜柑』で真夏に蜜柑を探させたり、『崇徳院』でどこの誰とも知れぬ相手を探させたり、『質屋蔵』で蔵で真夜中に出没する化け物の張り番をさせたり、といずれも甲乙付けがたいような奇想天外な無理難題の連発である。奉公人とは雇傭契約関係で繋がっている

るが、手っ伝い職とは請負という関係になるであろう。この人物相関を単純化して図示すると、次のようになる。立場上は、依頼／命令の方が上位なのであるが、単純化して水平に並べた。客が店に足を運んで通常の売り買いをするというのでは変化に乏しい半面、「次はどうなるやら」と聴衆の想像力を掻き立てる筋立ての方が演出効果は高いであろう。



図十 依頼／命令の人物相関

注

- * 1 水道が敷設される以前は、水売りが水売りが桶に入れて水を売り歩いていた。杓の前後に水桶を一杯づつ、つまり二杯分を「一荷」と呼んだ。その倍が二荷である。

参考文献

- 桂枝雀（1995、1996）『桂枝雀爆笑コレクション』全五巻、東京：筑摩書房。
 桂米朝（1985）『続・上方落語ノート』東京：青蛙房。
 桂米朝（1991）『三集・上方落語ノート』東京：青蛙房。
 桂米朝（2013、2014）『米朝落語全集』全八巻 増補改訂版。大阪：創元社。
 角岡賢一（2007）『日本語オノマトベ語彙における形態的・音韻的体系性について』東京：くろしお出版。
 角岡賢一（2021）『上方落語に見られる待遇表現』東京：くろしお出版。
 古今亭志ん生（1989）『古典落語 志ん生集』東京：筑摩書房。
 三笑亭圓生（飯島友治編、1990）『古典落語 圓生集 下』東京：筑摩書房。
 釈徹宗（2010）『おてらくご 落語の中の浄土真宗』京都：本願寺出版社。
 高島幸次（2018）『上方落語史観』大阪：一四〇B。
 日本語文法学会 編（2014）『日本語文法事典』東京：大修館書店。
 前田勇（1966）『上方落語の歴史』改訂増補版。大阪：杉本書店。
 牧村史陽（1984）『大阪ことば事典』東京：講談社。